



Title	C.de Bridia による Hystoria Tartarorum 訳・注(1)
Author(s)	海老澤, 哲雄; 宇野, 伸浩
Citation	内陸アジア言語の研究. 1995, 10, p. 13-65
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/17775">https://hdl.handle.net/11094/17775</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# C. de Bridia による *Hystoria Tartarorum* 訳・注 (1)

海老澤 哲雄  
宇野 伸浩

## はじめに

フランシスコ会修道士ヨハネス・デ・ブラノ・カルピニは、1245-1247年にローマ教皇インノケンティウス4世の使節として教皇の書簡を帯びてモンゴルへ赴き、グユク・ハンに会い、その教皇あて返書を将来したほか、帰還後に報告書 *Historia Mongalorum* を著わした。その報告書は、当時の西ヨーロッパでは未知の世界であったモンゴルを含む東方のアジアの状況をはじめて西ヨーロッパに紹介した文献として意義のあるものである。また近代にいたって貴重な学術的資料として注目され、テキストも公刊され、多くの言語に翻訳されて利用されてきた。<sup>(1)</sup>ところが、1957年にいたってカルピニの報告に密接に関連する内容の15世紀の写本が発見された。それは、1965年に写本の写真版およびG.D.ペインター氏による解説・解読テキスト・翻訳・注釈などからなる大著となって刊行された。<sup>(2)</sup>この文献は、ペインター氏の考察によると、次のような経緯で生まれたという。

カルピニがモンゴルに向かうとき、ブレスラウから随行した同じフランシスコ会のベネディクトゥス修道士は、カルピニと同様にさまざまなモンゴル情報を入手しており、自らのノートを作成していた。帰還後にケルンで、モンゴルへの途中あるいは現地で見聞したことなどについて比較的短い口頭報告を行っ

---

(1) 以前から利用されてきたのは、Wyngaert 1929, pp.27-130 であるが、数年前に Menestò 1989が刊行された。

(2) 日本語訳としては、護 1965がある。

(3) Painter 1965.

たが、それを記録したものは、つとに *Relatio Fr. Benedicti Poloni* として知られている。<sup>(4)</sup> それに先立つ1247年7月に同修道士は、クラカウカ、プレスラウカ、プラハカにおいて、ラテン語以外のことば、ポーランド語かチェコ語かを用い、モンゴル事情について聴衆を前にして口頭報告を行った。その際、フランシスコ会のブリディア修道士 Fr.C.de Bridia は、上司のボグスラウス修道士 Fr.Boguslaus のもとめに応じ、その口頭報告を聴取して記録をとり、そしてラテン語で記したこの文献 *Hystoria Tartarorum* を完成させたのである。<sup>(5)</sup>

カルピニの報告が古くから人に知られていたのとは対照的に、この文献は久しく人目にもつかず忘れ去られ、20世紀も後半になってはじめて発見されたのである。この文献が公けにされたのちまもなく、ペインター氏による写本テキストの解読には問題があるとし、同じ写本にもとづく新テキストが公刊された。<sup>(6)</sup>

ところで、モンゴル帝国史の主な史料は、元朝やイルハン国で書かれた史料であり、ともにトルイ家の台頭後に編纂された史料である。そのためその中には、オゴデイとグユクの治世に関する記載が削られていたり、また曖昧なことが間々あると指摘されている。カルピニの報告書 *Historia Mongalorum* やルブルクの旅行記など西ヨーロッパ側の文献は、1240-50年代に現地モンゴルを訪れ、生の情報を収集した上で作成した報告であり、上述のような史料の欠を補うものとして研究上貴重な価値をもっている。

新たに発見され刊行されたブリディアの *Hystoria Tartarorum* は、カルピニの

---

(4) Wyngaert 1929, pp.135-143; 護 1965, pp.117-125,「ポーランド人ベネディクト修道士の口述」。

(5) Painter 1965, pp.40-42.

(6) Önnersfors 1967. この編者にはほかに、Önnersfors 1966があり、この論文では、本書の正書法、写本、言語等について論じ、さらにペインター氏による写本の読解・解釈上の問題点十数か所をあげて検討している。

グスマン氏によると、ペインター、オネルフォルス両氏が利用した写本のほかに、もう一種別な写本があるという (Guzman 1991, p.35; p.58,n.21) が、管見の限りではいまだ詳しいことは明らかにされていない。

報告と内容的に重なっている箇所も少なくなく、量的にもカルピニよりはるかに少ない。<sup>(7)</sup> その意味ではそれほどの重要性のない、単なるカルピニの省略本であるかのようにも見える。しかし私たちは以下の諸点において史料として価値をもつと考える。

第一、本書は、カルピニの報告書をはじめとする他の文献に見られない、モンゴルに関する独自の情報、例えばバトゥとグユクとの仲違い、あるいはモンゴル軍のハンガリー、ポーランド侵攻に関する情報を伝えていることである。

第二、本書のうち、内容上カルピニの報告書と重なる部分についても、次の点が指摘される。ベネディクトゥスが口頭報告の原稿となったものを作成するとき、カルピニと共通の資料に基づきながらも、自らの判断で資料の取捨選択と配列とを行っている。そのため、カルピニを利用する場合も、記述内容を本書中の対応する箇所と比較検討することによってその偏向あるいは色合いをあぶりだし、より相対化して客観的に理解することができ、史料として一層有効かつ適確に活用することが可能になると考える。<sup>(8)</sup>

第三、本書中、とくにチンギス・ハンの遠征の記事については、ペインター氏の考察によりいわゆる「アレクサンダー・ロマンス」の影響が及んでいることが明らかにされている。従って、カルピニの報告書についても、また同様のことがいえる。これによって、内陸アジアにおけるネストリウス派キリスト教弘通に伴う文化伝播という問題が改めて浮上してきた。本書もカルピニの報告書

---

(7) この文獻全62節のうち、前半を占める1節から34節までは、内容的にカルピニのV章に対応し、後半の35節から61節までの記事は、カルピニの方ではI章からVIII章にまたがって見えている。同じ内容を記しながらも、カルピニの方が詳しい。とくに軍事に関する記事においてその傾向が顕著である。

(8) 例えば、現地における情報の入手先について、カルピニは、捕虜としてモンゴルに拉致されたロシア人などのキリスト教徒であるとし、だからこの報告の内容は信をおくことができるということを強調している。ところがブリディアには、モンゴル人からも聴取していたことを示す文言が散見している。これはカルピニの方が意識的にそのことを伏せたと考えられる。一般的にいつてカルピニの方により作為の傾向が見受けられる(海老澤 1993/94参照)。

も、つとに紹介されているモンゴル語訳「アレクサンダー・ロマンス」<sup>(9)</sup>残簡と並んでその基礎的な資料となるであろう。

私たちは、以上のような本書の価値を重視して、なお検討の余地を残しながらも、あえてここに試訳を公にすることにした。

### 凡例

1. 本稿は、C.de Bridia, *Hystoria Tartarorum* を全訳し、注を付したものである。
2. 翻訳の底本には、Alf Önnersfors によって校訂され、言語学的な注釈を付された *Hystoria Tartarorum*, C.de Bridia Monachi (=Önnersfors 1967) を用いた。
3. 訳出にあたっては、George D.Painter, "The Tartar Relation, edited, with Introduction, Translation, and Commentary," in: Painter 1965, pp.19-106 を参考にした。このPainter 1965 には、原写本のファクシミリが、"The Vinland Map and the Tartar Relation: Facsimiles of the Manuscript Originals." (pp.17-18 +13plates) として付されている。
4. 訳文中の[ ]内は、文意を補足するために訳者が付したことばである。〈 〉内は、カルピニ (Iohannes de Plano Carpini, *Historia Mongalorum*) ではなく、本書にのみ見られる箇所である。〈 〉内は、原著者がモンゴル語の意味をラテン語で説明している場合、訳者がそのラテン語に付した訳語である。各節の訳文の末尾には、対応するカルピニの章・節を記した。カルピニのテキストとしては、Menestò 1989を用いた。
5. 本号では、およそ半分にあたる1節から27節までを扱い、次号でその残りの28節から62節までを扱うことにする。

『タルタル報告』はここよりはじまる。

1 〈ボヘミアとポーランドに住む「小さき兄弟」の管区長にしてもっとも尊敬すべき父ボグスラウス<sup>(a)</sup>修道士に対し、「小さき[兄弟]」の中でもっとも卑小なるC・デ・ブリディア<sup>(b)</sup>修道士は、義務としてまた心をこめて、子としての従順なる服従を[誓う]。完璧に従順であるには次のような務めを果たさなければならない。すなわちそれは、ひとが従順でありつつ訓育を受けようと願うとき、自ら進んで上司の意に添い、ただに容易なことのみならず困難なことにも立ち向かうことである。生来の非才の及ぶところではないが、あなたがたの父の威信

(9) Poppe 1957; Cleaves 1959.

に服しつつ、われら修道会の尊敬すべき修道士のかたがた——すなわちよろもろの外部の国々、とりわけタルタルへの教皇特使であるヨハネスおよびその同僚であるポーランドのベネディクトゥス修道士、ボヘミアのケスラウス修道士——とともに、タルタル人について目睹し理解したことを読者が煩雑さを感じないように私は簡潔に書き留めた。そしてこれからの話を聞いているあなたがたの敬虔さ——この世の終りに聖人のとりなしのときがやってくるが、そのときになって明らかとなる全能なる神の不可思議にして秘められた審判の内より、俗界に関する有益な知識を引出すべを、その敬虔さのおかげで心得ているけれども——が神の称賛と愛のいずれの内へも高まるように。

◇カルピニに対応箇所なし

- (a) ボグスラウス Boguslaus 「小さき兄弟」修道会 (Ordo Fratrum Minorum), すなわちフランシスコ会の修道士。1247年から1251年まで同会のポーランド・ボヘミア管区の責任者をつとめていた。
- (b) ブリディア Bridia ペインター氏は、Bridia は綴りが誤写されているとし、この人物が東ヨーロッパ人であるとする、シレジアの Bieg を意味する Brega, Briga が想定され得るとした。<sup>(10)</sup> その後にでたシチェスニャク氏の論文によれば、シレジアの一州 Brzeg のことで、同時代のポーランド文献には、Briga, Breda, Breg などとも記されているという。<sup>(11)</sup> 両氏のあげている場所は同一のものであろう。ブリディアに付された「小さき[兄弟]」の中でもっとも卑小なる」(inter minores minimus) は、ペインター氏によると、当時のフランシスコ会修道士がよく用いた謙譲の辞で、必ずしも地位がもっとも低いことを意味するものではないという。<sup>(12)</sup> ルブルク修道士の場合も、自分のことを「小さき兄弟修道会にあってもっとも卑小なる」(in Ordine fratrum Minorum

(10) Painter 1965, p.54, para.1, n.2.

(11) Szczesniak 1966, p.374.

(12) Painter 1965, p.40.

minimus) といっている。<sup>(13)</sup>

- (c) もろもろの外部の国々 このような表現を用いているのは、カルピニが対モンゴル工作のほかに、東ヨーロッパのギリシア正教会傘下の国々をローマ教会に帰するように働きかけることを使命としていたからである。<sup>(14)</sup> カルピニIX章3節によると、そのことをさとす教皇の書簡も託されており、カルピニはウラディミール公や司教の前で読み上げ、説得につとめたという。
- (d) タルタルへ テキストには、“Tartaros cacoros”とある。ペインター氏によれば、これはもともと Tataros と記されていたものを、当時の西ヨーロッパでモンゴルの通称になっていた Tartarus に引きずられて“Tartaros”と訓み、もとの綴り Tataros も cacoros の形で残されているという（ここでは c は t に通ずる）。<sup>(15)</sup> このペインター氏の見方は、カルピニが帰還後にサリムベネ修道士らに、Tartari ではなく、Tattari と呼ばれていると語ったことを踏まえたものである。<sup>(16)</sup>
- (e) ボヘミアのケスラウス Ceslaus Boemus ペインター氏は、キエフを出て間もなく体が弱ったため旅行を断念したステファヌス Stephanus Bohemus と同様に、このケスラウスもカルピニ一行のメンバーと見ている。<sup>(17)</sup> 確かに本節の記述からは、カルピニと行動をともにしてきたように見受けられる。しかしシチェスニャク氏は、この人物はもともとモンゴルまで同行していたのではなく、カルピニの一行が帰途リヨンに向っていたとき、ポーランドかボヘミアで一行と出会い、モンゴル情報を入手しただけであろうと見ている。<sup>(18)</sup>
- (f) 目睹し 写本テキストではこのことば“vidi”を含むくだりは、“que vidi de Tartaris intellixi”となっていて文法上破格である。そのために、“vidi”をペイ

---

(13) Wyngaert 1929, p.164.

(14) Szczesniak 1957; Zatkó 1959, pp.41–52.

(15) Painter 1965, p.54, para.1, n.5.

(16) Scala 1966, I, p.298.

(17) Painter 1965, pp.35–36.

(18) Szczesniak 1966, p.374.

ンター氏はテキストから削除してその旨を注記<sup>(19)</sup>し、オネルフォルス氏もテキスト上“[vidi]”と記して削除されるべきことばとしている。ここでは強いて削除せずに、“que vidi de Tartaris <et> intellixi”と考えて訳した。

2 くそこで知ってほしいのは、タルタル人とその他の人々が、この世界の居住圏を、夏期と冬期に日が昇り沈む範囲に広く展開している2つの主要な部分、すなわち東洋と西洋に分けていることである。西洋は、リヴォニア<sup>(a)</sup>の地にはじまってプロシア<sup>(b)</sup>からギリシアに至り、さらにはカトリック信仰の普遍的教会をその内に含んでいる。従ってタルタル人も教皇を全西洋に君臨するものと見て大教皇<sup>(c)</sup>と呼んでいる。一方、残りの部分は東洋といい、そこにはタルタル人の土地が存在する。その土地は、東方が北方<sup>(d)</sup>につながり、北の大洋の海と接し、モアル<sup>(f)</sup>と呼ばれている。

◇カルピニ I 章 3 節, V 章 2 節

- (a) リヴォニア Liuonia 今日のリトヴィア共和国を中心とする、バルト海リガ湾に面した地域。当時、ドイツ人の刀剣騎士団とドイツ騎士団が合同して統治しており、ローマ教会の布教の最前線基地になっていた。
- (b) プロシア Prusia 狭義のプロイセン。リヴァニアの南西にあたり、ヴィスワ河にいたるバルト海に面した地域で、今日のポーランド共和国の東北部もここに含まれる。
- (c) 大教皇 Magnus Papa グユク・ハンの教皇宛返書でも、大教皇（ペルシア語訳 Pāpā-yi kalān, ラテン語訳 Magnus Papa）と呼んでいる。<sup>(20)</sup> フランシスコ会サリムベネ修道士は、カルピニから聞いた話として、カルピニはグユクから、「西方にあって統治しているのは何人か」と問われたのに対して、「2人で、教皇と皇帝である」と答え、さらにグユクから「そのうちどちらが上か」

(19) Painter 1965, p.55, para.1.(c).

(20) Pelliot 1922/23, p.17; Luppran 1981, p.184.



と問われ、「教皇である」と答えた<sup>(21)</sup>と記している。本節の記述は、グユクがかねてから教皇について認識をもっていたととれるが、カルピニから得た情報で、はじめて教皇の地位を認識し、上記のような敬称を用いたと考えられる。

- (d)「東方が北方につながり」 おそらくモンゴルがアジアの東北部に位置する、あるいは東北隅に近いことをいっているであろう。
- (e) 大洋の海 とくに大洋 oceanus の海という場合、中世西ヨーロッパの地理的世界観では、アジア、ヨーロッパ、アフリカからなる地上の陸地の周囲を環状にとりまく広大な海で、その先にはもはや陸地の存在しないものを指す。<sup>(22)</sup>従って、黒海や地中海のように陸地に挟まれているような海はこれに該当しない。本節でモンゴルの地が北の大洋の海に接しているということは、モンゴルが地上の陸地のうちで北の最果てに位置すると理解していたことを意味する。のちに掲げる本書14節に「前述の場所が世界の最果てに位置していて、その向うには大洋の海以外には陸地は見当たらないという」とある。これは、当時の地理的世界観に即した記述である。
- (f) モアル Moal モンゴル Mongyol のこと。そのトルコ語形 Moyal に由来する。ルブルクXVII章4・5・6節ほかでも Moal と記されているが、カルピニV章2節には、Mongal とある。

3 その土地にはチンギスという名の、〈高貴の出であるが残忍な性格の〉男がおり、〈タルタル人はかれから始まった。かれは少数の手下とともに略奪行為を開始した。ついで、一段と残忍になると、ひそかに〉人間を掠めて〈その不当な支配のもとにつなぎとめるようになった。自らのもとに30人の親衛隊ができると、公然と狂気の行動に走り、自分の生まれた土地、すなわちモアルの全体を完全に自分の支配下に収めた。それが済むと、高慢な性格であったので、一層

---

(21) Scala 1966, I, p.298.

(22) 織田 1950, pp.13-15; Kimble 1968, pp.20-27.

激しい攻撃を開始し、兵力を集めると、かれらがズウモアル<sup>(a)</sup>、すなわち水モンガルと呼んでいる、く東側に隣接している地域に進撃した。タルタル語で「ズウ」とは、ラテン語の“Aqua”《水》であり、モアルは土地の名称で、モンガルはその土地の住民の名称である。さらにズウモアル自身は、かれらの土地を流れるタタルというく激流の大河にちなんでタルタルス<sup>(b)</sup>と称している。くかれらのことばの“Tata”は“trahere”《引く》の意であり、“tartar”は“trahens”《引いている》の意である。かれらは自分たちの上に指導者を置いていたが、その時期にはカウリ<sup>(c)</sup>というものが指導者に選ばれていた。チンギスはその指導者を倒し、服従した者を自分の軍隊に加えた。というのは、一層大きな兵力を以て他の地域を打ち破れるように、倒した相手をかならず自分の方に吸収するのが習慣になっていたからである。それは、かれの姦策を受け継いだ後継者の場合に明白になっている。

#### ◇カルピニV章2・3節

(a) ズウモアル Zumoal カルピニにおける Sumongal (V章2節)、ルブルクにおける Su-Moal (XXIX章45節)、『元史』地理志における「水達達」に対応すると考えられる。Zu または Su はトルコ語の水 su (モンゴル語 usu) に由来する。この種族は今日の中国東北地方にあって狩猟に従事していた。『元史』卷59, 地理志, 遼陽行省, 合蘭府水達達等路の条に「其居民は、皆水達達・女直之人なり。各舊俗に仍り、市井・城郭無く、水草を逐いて居を為り、射獵を以て業と為す。」と記されている。<sup>(23)</sup>

(b) タルタルス Tartarus モンゴルはタートル (元来モンゴル東部の一種族の名称)とも称されていたが、西ヨーロッパではモンゴル人が「地獄(Tartarus)から解き放たれた悪魔のように」突進してきたというので、Tartar という呼称が一般化していた。またタルタルがTar という川の名前に由来するとする説

---

(23) 中華書局版『元史』第5冊, p.1400.

<sup>(24)</sup>  
もあった。

- (c) 「“Tata”は“trahere”《引く》の意」 写本テキストでは“Tata enim grece trahere”とあり、grece《ギリシア語で》の5文字の下にそれぞれ点が付されていた。ペインター氏は、greceをlatine《ラテン語で》に置き換えて“Tata enim latine trahere”とし、オネルフォルス氏は、greceを削除して“Tata enim trahere”とした。上記の訳文は後者に従っている。モンゴル語 tata- は、上記のようにたしかに引くの意であるが、サイナー氏によると、トルコ語で tart- が引くの意で、その分詞形 tartar (引いている) が意味の上でラテン語 tradens に対応する<sup>(25)</sup>という。

- (d) カウリ Cauli ここでは人名として表れているが、一般には、ルブルク(XXIX章49節)における Caule, マルコ・ポーロにおける Cauli, チベット語敦煌文書(Pelliot tibétain 1283)における Ke'u-li のように、高麗を指す名称<sup>(26)</sup>である。

4 くついでかれは全軍を率い、夏に日が没する方角で<sup>(a)</sup>タルタルと接しているメルキトと呼ばれる地方に急行した。その地方を軍事力によって自らの統治下に収め、く自らの兵力を増強したのち、メルキトと隣りあった<sup>(b)</sup>メクリトという地方に進撃し、たちまち征服した。これら4種族、すなわちモアルとズモアルとメルキトとメクリトとは、同じことばを話すが、その間に少し違いがある。くそれは、ちょうどボヘミア人とポーランド人とロシア人、あるいはローマ人とロンバルディア人とフリュウル人、あるいはオーストリア人、チューリンギア人とスワビア人、あるいはサクソン人とフランダース人とウェストファリア人がそうであるようなものである。それらの地方の人々は顔形がそっくりである。

#### ◇カルピニV章2・3節

---

(24) Giles 1853, I, p.312, p.131.

(25) Sinor 1970, p.547.

(26) Ronchi 1982, p.411; 森安孝夫 1977, p.19.

- (a)「夏に日が没する方角」 西北。メルキトの住地セレンゲ河下流域は、チンギス・ハンの「タルタル」の住地オノン河流域から見れば西北の方角にあたる。
- (b) メクリト Mecrit ルブルクのXVII章3節にネストリウス派キリスト教徒としてあげられている“Crit”と同じで、ケレイト (Kereit) 族のことと考えられている。ただしブリディア8節には、ケレイトと解することもできる Karanitas という種族名が見えている。また同じく34節には、タルタル人に征服された種族としてやはりケレイトともとれる Keranite も、Mecrit もいずれもあげられている。従って一概にメクリトを以てケレイトと断定しがたく、後考に委ねたい。

またマルコ・ポーロは、バイカル湖東岸地方に“Mecrit<sup>(27)</sup>”という狩猟民の種族がいたことを伝えている。この種族について愛宕松男氏は、『契丹国志』巻22(四至鄰国地里遠近)の「鼇古里国」、劉郁『北使記』の「磨可里国」、『元史』巻11(世祖本紀、至元18年8月)の「滅乞里」に対応するが、住地の点で“Mecrit<sup>(28)</sup>”がバイカル湖東岸であるのに対して、「鼇古里国」等は天山北東部であるので符合しないと、あるいはメルキト Merkit の誤りかと注記している。

5 こののちチンギスは兵を集めてウイフル<sup>(a)</sup>という地方に進出した。この地方の住民は、ネストリウス派のキリスト教徒であった。ここを制圧すると、モンガル人は、それまでものを記すための文字をもっていなかったため、そのウイフル人の文字を取り入れた。そうして、自国へ戻った。

◇カルピニV章8・9節

(27) Ronchi 1982, p.393.

(28) 愛宕 1970, 1, p.157, 注2.

- (a) ウィフル Vihur ウィグルのこと。ウィグルは1211年にチンギス・ハンに服した。またモンゴル人がウィグル文字を採り入れたことは周知の通りである。この節では、ウィグルの住民はネストリウス派キリスト教徒として紹介されているが、ルブルクXXIV・XXV・XXVI章によると、この地方の都市に、偶像教徒（仏教徒）とキリスト教徒とイスラム教徒が入り交じって住んでいるという。

6 くチンギスは、このあとすぐに、一層強力な兵力を結集すると、エスルスカ  
(a) キタという東方の地方を襲った。実はその地方の住民は自らキタイと称してお  
(b) り、モンガル人は、モンガル人と同じことばを話す他の3地方とともに、以前  
キタイに対して貢物を届けていた。この地方は非常に広大であり、きわめて豊  
かであり、そこには辣腕をふるう勢力の大きい皇帝がいた。皇帝は、このよう  
なうわさを耳にすると、激しく敵意を燃やし、十分な兵力を率いてある広大な  
荒野でチンギスとその軍隊を攻撃した。モンガル人は手痛い敗北を喫したの  
で、モンガル兵のうち7人しか残らなかったほどであるが、く他の種族は、多数  
のものが難を逃れた。上記の皇帝はこのことを知ると、殺したものの武器を集  
めることさえ手をぬいた。一方チンギスはくひそかにく自分の国に逃げ、しば  
らくの間はわるだくみを差し控えた。

#### ◇カルピニV章7・8節

- (a) エスルスカキタ Esurscakita 未詳。ペインター氏は、Jurchet（女真）の転訛  
(29) と推定する。確かに文脈のなかではそれで意味が通るが、綴りの違いがいち  
じるしく、にわかに従いがたい。
- (b) キタイ Kitai もともとこのことばは契丹に由来するが、一般的には中国北  
部の意に使われる。ここではとくに金朝を指す。この節と同じ内容のカルピ  
ニV章7節について、クロノロジーの点から見てモンゴル人が戦った「キタ

---

(29) Painter 1965, p.59, para.6.n.1.

イ」というのは金朝ではなく、西夏とする説がある。<sup>(30)</sup> 本節によると、かつてモンゴル人がその「キタイ」に貢物を納め、またその領土が広大であり、勢力の大きい皇帝がいたことになっている(カルピニはこの記述を欠く)。これらの点から見て、やはり上記の「キタイ」は西夏とは思えず、金朝と見るのが妥当であろう。また本節によると、モンゴル側は致命的な敗北を喫したことになるが、その敗北というのは、おそらく、護雅夫氏のいうように、チンギス・ハン時代ではなくして、その先祖の時代における体験の口碑<sup>(31)</sup>に由来するものであろう。ちなみに1210年代におけるチンギス・ハンの金朝との攻防戦では、チンギス・ハン側の敗北が皆無だったわけでない。牧野修二氏の研究によれば、1212年に宣徳、居庸関への進出を企てるチンギス・ハン軍は、徳興付近で金朝軍の反撃に会い、チンギス・ハン自身も負傷し、敗退したという。<sup>(32)</sup> この敗退について『元史』巻1、太祖紀、7年壬申秋の条には「復た西京を攻め、帝、流矢に中り、遂に圍を撤す」と記されている。<sup>(33)</sup> これは一時的敗退であって壊滅的なものとは思えない。

7 さらに西方からタルタル人に接する地方があつてナイマンと呼ばれており、〈そこは大変山がちで寒さが度を越している〉。タルタル人や周辺の地方はみな、その当時、この地方の君主を王と仰いで貢物を納めていた。〈チンギスが戦いを休んでいたとき〉、その君主が死んだ。けれども幼い〈3人の〉こどもたちが王国の相続人として遺されていた。このことを聞くと、チンギスは〈こどもたちのナイマン王国を狙いはじめ〉、兵を集めて侵入を開始した。こどもたちは、〈その兵力を見ると、後方に退いた〉。そしてカラキタイ、すなわち黒いキタイ〈——つまりタルタル語の「カラ」は、ラテン語で“nigrum”《黒い》である

---

(30) Menestò 1989, p.431, n.12.

(31) 護 1965, p.95, 注10.

(32) 牧野 1987, pp.5-11.

(33) 中華書局版『元史』第1冊, p.16.

——と連合してから、モンガル人を二つのたいへん高い山の間のある谷合で攻めた。<sup>(c)</sup>〈かれらは近隣からその地域に入るただ一つの道をふさぎ、かなり長く閉じ込めた〉。この谷合とその地域は、われら修道会の修道士もタルタル人のところへ行くために通過した。〈最後にはモンガル人は[ナイマンの]軍隊からはるか遠く離れた低い山を、またある者はただ野生の山羊しか通れない険しい山を越えた。ベネディクトゥス修道士もその箇所を馬に乗って通過しようとはかったが、馬や人夫を失うことになるからといってタルタル人が許さなかったのである。さらに残りの者は、[ナイマンの]軍隊の前衛に接近した〉。こうしてナイマン人は四方からかなり大規模な戦闘をしかけられ、その結果ナイマン人の大部分が殺され、残った者はチンギスの支配に服した。そのとき、チンギスは〈君主の3人の息子を殺し、[服してきたナイマン人により]数を増した軍隊を率いて〉自国に引きかえした。

◇カルピニ I 章 3 節, V 章 4・5・7 節

(a)「幼い3人のこどもたちが王国の相続人として」 本節の内容は、『集史』など他の史料とあまり一致しないが、王国の相続人とされる3人に該当する人物をあえて捜してみるならば、イナンチ・ビルゲ・カンの息子のタヤン・カンとブイルク、そしてタヤン・カンの息子クチュルクが挙げられる。しかし、この3人は、この戦いの時点で、「幼いこども」であったわけではない。タヤン・カンはこの戦いで戦死し、ブイルクは1206年にチンギス・ハンに殺されたが、クチュルクのみ逃走して生き残った。クチュルクについては次注(b)参照。

(b) カラキタイ Karakitai 上記の通りモンゴル語で黒いキタイ (Qarakitad) を意味する。遼朝の一族耶律大石によって1132年に中央アジアに立てられた国、漢称西遼を指す。史実として、とくにナイマンとカラキタイが連合してモンゴルに立ち向かったことがないにもかかわらず、本節では、両者が連合したと記されている。ナイマン王タヤン・ハンの子クチュルクは、この戦いが行

われた段階ではカラキタイとはなんら関係がなかったが、チンギス・ハンに追われて中央アジアのカラキタイに逃げ込み、1211年にその王権を篡奪して事実上のカラキタイの君主となるに至った。こうした時間的前後関係を無視して、クチュルクを含むナイマン勢力を、ナイマン軍とカラキタイのクチュルク軍との連合と解したのであろう(なお、クチュルク1218年にチンギス・ハンの派遣したジェベによって倒されている)。

- (c)「谷合で攻めた」 1204年にハンガイ山でチンギス・ハンがナイマン王タヤン・ハンをで打ち破った戦いがこの記述の背景にあると考えられる。ただ、この戦いについて『集史』チンギス・ハン紀には、「夜になるとタヤン・ハンの軍が破れ、チンギス・ハンはかれらを追った。背走者たちは非常に恐れて、険しい山に入り込んだ。夜の間にナククン Nāqūqūn という名の険しい山、切り立った岩から、ナイマン軍の多くの者が滑って転び落ちて死んだ。この話はモンゴル人の間で有名である<sup>(34)</sup>」と、ナイマン軍が大敗したことを伝えるのみで、モンゴル軍が谷合に追い込まれて窮地に陥ったことは記されていない。

8 ついでチンギスはく東南の方面へ遠征に出て、4 地域すなわちウオイラ<sup>(a)</sup>とサリフィウル<sup>(b)</sup>とカラニト人<sup>(c)</sup>とくコスミル<sup>(d)</sup>を占領した。そして帰国の途についた。

#### ◇カルピニV章8節

- (a) ウオイラト Voyrat オイラト Oirat 族に当たる。その居住地は、モンゴル高原西北部の、アンガラ河とイェニセイ河の間、ホブズグル湖西岸のダルハト盆地である。オイラト族は1208年にチンギス・ハンに降っている。
- (b) サリフィウル Salihuiur サリク・ウイグル Sariy-Uiyur 族の地、甘肅の西辺。

---

(34) Rashid/TS 1518, fol.90a.



サリク Sarii はトルコ語で黄色を意味する。佐口透氏の研究によると、サリク・ウイグル Sarii-Uiyur 族は、10世紀のウイグル崩壊後に移住してきた甘州回紇集団のうちロプノール東方から沙州・甘州方面に分布したもので、この集団が宋代の中国文献に「黄頭回紇」と見えるのは、この集団に含まれていた黄色テュルギシュ族の名が転じたものである。1226年にモンゴルに征服されてその統治下にはいった。『元史』には「撒里畏吾」(速不台伝)、「撒里畏兀」(文宗本紀，至順2年7月)と表記されている。その後16-17世紀にこの種族の一部はモンゴル化してシラ・ウイグルとよばれた。現代のサリク・ユグルは、このサリク・ウイグルの後裔であるという。<sup>(35)</sup>

(c) カラニト人 Karanitae 未詳。ペインター氏は次の4案を挙げている。①1207年に服したキルギス Kirghis(別名ケレグト Keregüt)，②1207年に服したトゥマト Tumat，ホリ・トゥマト Qori-Tumat，③オングラトの一支族であるハラヌト Qaranut，④ケレイト Kereit の姉妹語(doublet)。文脈の上では、はじめの2案が合うとする。<sup>(36)</sup>

(d) コスミル Cosmir 未詳。この綴りはカシミール Kashmir を思わせる。カシミールにモンゴル軍が初めて足を踏み入れたのはオゴデイ・ハン期であり、かつ本節に挙げられているオイラトやサリ・ウイグルからはかなり離れた地にあるから、カシミールと解することには疑問が残る。ちなみに本節の対応するカルビニには、このコスミルはなく、その代りにカナナ Canana という名が挙げられているが、これもいかなる種族か不明である。

9 くしかしチンギスは支配欲にかられ、休息をとっていられなかったので、できる限りつわものの兵を結集すると、ふたたびキタイ人の皇帝<sup>(a)</sup>に向かって進撃した。ついに長期にわたる戦闘ののち、く皇帝の軍隊を退け、とりわけ堅固な都市である首都のなかに皇帝本人を包囲した。そのため包囲している側でも極

(35) 佐口 1972.

(36) Painter 1965, p.60, para.8, n.4.

度に食糧が不足し、チンギスの命令で十人長が部下とともにかれらのうちの十番目の人間を食するまでにいたった。<sup>(b)</sup> それに対し、包囲されている側も、すでに矢や石が底をついてきたことがはっきりしたので、敵に向かって銀、とくに溶解したものを投げはじめた。というのも、この都市にはこうした財貨が豊富にあったからである。最後には、包囲軍がその都市の中央部まで地下道をつくり、そこから夜間に都市の中に侵入し、皇帝を有力者ともども殺害し、都市にあったものをことごとく手に入れた。そのため、チンギスは占領した地区の秩序が回復すると、喜んで本国に帰還した。なお今日にいたっても、タルタル人がいまだ占領できていない地域が沿海方面に残っている。<sup>(c)</sup> そのときから、チンギスは自分のことをカン、すなわち皇帝と呼ぶように命じた。<sup>(d)</sup>

#### ◇カルピニ V 章 9 節

- (a) キタイ人の皇帝 金朝の皇帝宣宗がこれにあたる。当時首都の中都にいた。この皇帝は本節の後段では殺害されたことになっているが、実際には1214年モンゴル軍に包囲されたときは、殺されておらず、和を結んだ。その後開封に遷都したあと、再びモンゴル軍の攻撃を受けるようになった。
- (b) 「人間を食する」 包囲された側はともかく、モンゴル軍側がそれほどの飢饉に見舞われたとは考えにくい。グスマン氏の所論に従えば、もともと西ヨーロッパには、カニバリズムは、ゴグ・マゴグに象徴される北方の邪悪な蛮族に随伴するものとする見方があり、モンゴル人に関する記述を残したカルピニをはじめとする13世紀の聖職者たちも、その固定観念にとらわれていたと<sup>(37)</sup>いう。
- (c) 「占領できていない地域」 南宋領を意味する。なおモンゴルが金朝領をすべて占領したのは1234年であり、南宋領を占領したのは1279年である。
- (d) カン can チンギス・ハンがハン(カン)を称したのは、モンゴル統一後の

---

(37) Guzman 1991.

1206年であり、本節でいっているように、金朝領を侵すようになってからではない。

10 (a) ところで上述のキタイ人は、異教徒ではあるけれども、やはり新旧の聖書と、固有の文字とたくさんの教父の伝記を持っており、隠者もあり、決まった時間に祈祷を行う教会のような建物もある。さらに、かれらには何人かの特別な聖人がいるといわれている。キタイ人は唯一の神を崇め、主イエス・キリストを信じ、やはり生命の不滅を信じている。決して洗礼を受けることはないが、たくさんの施しをキリスト教徒に与え、〈かれらを尊敬している〉。キタイ人にはひげがなく、モンガル人ほど顔が幅広くなく、固有のこたばを持っている。

#### ◇カルピニV章10節

(a) 新旧の聖書 上記のカルピニの一節における「聖書」についてロックヒル氏は、本文を引用したのち「旧約」を五経、「新約」を四書と注した（「教父の伝記」<sup>(38)</sup>については論語、孟子とした）。ベケ、アンビス両氏は、この「聖書」について仏典と解しているようであり、また最近、ダフィナ氏も、儒道の典籍<sup>(39)</sup>ではなく仏典であろうという。

本節および上記のカルピニの一節は、ヨーロッパ人による中国文物を最初の紹介記事である。ただしこのキタイが古代に知られていたセレス Seres にほかならないことに、カルピニらは気づいていなかった。

11 かくて、〈チンギスはカンと呼ばれ、1年間〉戦うことなく休息したが、その後、〈3個の〉軍団を〈世界の3方面に〉派遣し、〈地上に住んでいるすべての人々を従わせようとした〉。1軍は、やはりカンと呼ばれていた自分の息子ト

---

(38) Rockhill 1900, p.155, n.1.

(39) Becquet & Hambis 1965, p.153, n.53; Menestò 1989, p.434, n.17.

ス<sup>(a)</sup>ととも、く日<sup>(b)</sup>が沈む方面の、アスの彼方<sup>(b)</sup>にいるコマン人<sup>(c)</sup>に向って差しむけ、一方もう1軍は、別の息子とともにく冬に日<sup>(c)</sup>が昇る方角の>大インド<sup>(c)</sup>に向けて差しむけた。

◇カルピニV章11・12節

- (a) トスク Tossuc チンギス・ハンの長子ジョチ Joči のこと。『世界征服者の歴史』に、ジョチを Tūshī と表記しているのをはじめとして、ペルシア語史料に、しばしばこの Tossuc に対応する形が見られる。ペリオ氏によれば、Tūshī は、モンゴル語 Joči に対応するトルコ語形であり、Tossuc はそれに由来する。<sup>(40)</sup>
- (b) アス Az カフカーズ山脈に居住するイラン系の民族アラン人の別称とされている。24節注(g)アラン人の項を参照。
- (c) 大インド ペインター氏によると、小インドはインダス河以西の地域を、大インドはインダス河とガンジス河の間にある今日のインド亜大陸を指すとい<sup>(41)</sup>う。インドは大・小に2区分、あるいは大・中・小に3区分されていたが、それぞれの範囲については必ずしも一定しているわけではない。一つの使い方として、小インドがインド亜大陸の北部を、大インドが南部を、中インド<sup>(42)</sup>がエチオピアを指す場合があるという。

12 さらにチンギス・カン自身も第3軍を率いてカス<sup>(a)</sup>ペイの山々<sup>(b)</sup>に向かって進撃した。ソランギア<sup>(b)</sup>という地方を通過したが、そのときは同地方を自らは征服せず、く3か月間ずっと荒野を人に出会うことなく>進軍した。カス<sup>(c)</sup>ペイの山々く——そこは人々がゴグとマゴグと呼んでいたユダヤ人がアレクサンデル大王によって閉じ込められたところであるといわれている——>の近くに達す

(40) Pelliot 1950, pp.18-19.

(41) Painter 1965, p.68, para.17, n.1.

(42) Yule 1926, II, pp.425-427; Phillips 1988, pp.203-204; Wright 1925, pp.272-273.

ると、〈見よ、突然〉あらゆる鉄器類が、〈矢筒から〉矢、〈さやからナイフと剣、鞍からあぶみ、手綱からはみ、馬の脚から蹄鉄、体から鎧、頭から兜〉が、山に向かって〈大変な勢いで大きな轟音をたてて〉突き進んだ。〈かれらがこのことをわがベネディクトゥス修道士自身に話していたとき、頑丈な鎧や兜のような、かなり重い鉄器が地表を勢よく山に向かう際におびただしいほこりと轟音をまきおこしたと、おもしろそうに語っていた。このようなわけで、かれら自身はまったく目が見えなくなり大変な恐怖にかられていたのである〉。なおこれらの山々には磁力があると信じられている。

#### ◇カルピニ V 章 15 節

- (a) カスペイ Caspei の山々 カフカーズ山脈を指す。本節ではこの方面にチンギス・ハンが来たことになっているが、この地方はジェベとスベエテイの率いるモンゴル軍は通過したが、チンギス・ハンは来ていない。
- (b) ソランギア Solangia 本節に対応するカルピニ V 章 15 節では、Solangia のかわりに Kergis とあり、その場合の Kergis は、いわゆるキルギスではなく、Cherkes を指すと考えられている。ここのソランギアは、『元朝秘史』274 節に見える Solangyas (高麗人) の土地を指す。
- (c) ゴグとマゴグ 『旧約聖書』エゼキエル書 38、ヨハネ黙示録 20 に基づいて陸地の北の果てにおり、いつの日かサタンに惑わされて人々を襲うと恐れられていた勢力で、北方の蛮族あるいは邪悪な勢力あるいは神の王国の敵のシボルともなった。のちにゴグとマゴグの話は、アレクサンダー大王がゴグ・マゴグなど邪悪な勢力をカフカーズの山に閉じ込めたという 5 世紀にシリアで成立した伝承と一体化し、いわゆる「アレクサンダー・ロマンス」のなかに包含され、偽メトディオスの『黙示録』を通して西ヨーロッパに深く浸透した。<sup>(43)</sup>

---

(43) Guzman 1991, pp.42–44; Anderson 1932.

13 そこで〈恐れをなした〉チンギス・カンは、軍隊とともに逃げ出し、〈山々を右の方に見送って北〉東へ進んだ。ついに、〈続く3か月間〉ずっと荒野を苦勞して行軍していると、〈食糧が尽きたので、かれらの間で10人目の人間を食するように命じた。この3か月ののち、ナラ・イルゲン<sup>(a)</sup>すなわち「太陽の人々」と呼ばれる地方にある大きな山々に達した。タルタル語の「ナラ」とは、つまりラテン語の“sol”《太陽》のことであり、「イルゲン」とは“homines”《人々》のことである〉。そして踏みならされた道はあっても人ひとりいないことに気付くと、〈かれは部下とともに大いに不思議がりはじめた〉。それから間もなく女づれの一人の男に出会ったので、〈何人もの通訳を介し〉、土地の人々についてどこに住んでいるのか、問いただすことができた。山のしたの地下の家に住んでいることが判ったので、女は放さないで、捕えた男を派遣して、かれらに出てきて〈戦う〉意志があるかどうか、尋ねさせた。〈しかし、男がまだ戻って来ないうちに朝方になって夜が明けると〉、タルタル人は、太陽が昇ってくるとき轟音を発するので〈地面に身を伏せたが〉、その場所であれらのうち多くのものが死んでしまった。さらに土地の住民は、〈敵に気がつき、夜〉タルタル人を襲って多くのものを殺した。このことが判ると、チンギス・カンは残った部下とともに逃げ去ったが、それでも捕らえていた女は連れていった。

◇カルピニV章16節

(a) ナラ・イルゲン Narayrgen 本節で説明されているように、モンゴル語で nara は太陽を、irgen は人々を意味する。このナラ・イルゲンについては、日本を指すとする説も出されたことがあったが、本節と次節にまたがるナラ・イルゲンの説話は、やはりボイル氏のいうように「アレクサンダー・ロマンス」に起源をもつと見るべきであろう。ボイル氏の紹介するところによれば、アレクサンダーとその軍は、東進して太陽が天の窓に入る地方に到達する。太陽が海上に昇ってくるとき、その海域の住民は光線で焼かれないように海に身を隠す。そして太陽が天の窓に入るまで通過していく山岳地帯では、住民は

岩の中に洞穴を持っていて、太陽がやってくるとそこへ避難するという<sup>(44)</sup>。そしてこの説話は広く伝播したようである。地理学者ヤーコート(1179-1229)の伝えるオグズの伝承によると、ある先祖が東進して達した地方では、太陽が昇るところに近くて灼熱にさらされる。住民は地下や山に洞穴をもっており、太陽が昇ってくる時にはそこへ避難して通り過ぎるをまつという。また『コーラン』(XVIII章89節)では、東進する二本角(アレクサンダー大王のこと)について「ついに陽の昇る処に辿りついた。見ると、陽の昇る(国の)住民は日覆いというものを全然持たぬ人々であった」(井筒訳)と記されている<sup>(45)</sup>。ボイル氏は、ナラ・イルゲンの説話もこうした系列のものと見るのである。

ところで中国明代の類書『三才圖會』(王圻纂輯)、人物十二卷、沙彌茶國の条に、すでにクリーヴス氏によって紹介されている記事であるが、「沙彌茶國、前後人の到ること無し。唯古來聖人狙葛尼の曾て到る有り、遂に文字を立つ。其國、太陽西沒之地に係る。晩に至り日沒するに、聲、雷霆の若し。國王毎に城上に千人を聚めて、吹角鳴鑼擊鼓し、日の聲に混雜せしむ。然らずんば、則ち小兒驚死す。」とある<sup>(46)</sup>。この『三才圖會』所収の説話とカルピニV章16節中の太陽の発する轟音をめぐる説話、すなわち本節と次節のナラ・イルゲンの説話とは、細部の違いはあっても、太陽が轟音を発し、それに抗して住民が太鼓などを鳴らすという点で、クリーヴス氏は気づかなかったようであるが、酷似している。そして上記の文中の「狙葛尼」はアラビア語Dhu'l-qarnain<sup>(47)</sup>に対応し、二本角すなわちアレクサンダー大王を意味するから、この説話が「アレクサンダー・ロマンス」系列に属することは明らかである(なお「沙彌茶」はアラビア語 Jābarsā、西方の一番はずれにある都市の

(44) Boyle 1976, p.134.

(45) Boyle 1976, p.133; 井筒 1958, p.124.

(46) 成文出版社刊『三才圖會』p.832.

(47) Poppe 1957, pp.115-116, n.3.

名に対応する)<sup>(48)</sup>。この点から見ても、この説話に酷似する本節と次節のナラ・イルゲンの説話も、たとえアレクサンダーの名は現れていなくても、ポイル氏のいうように「アレクサンダー・ロマンス」起源と考えるのが妥当であろう。

14 <タルタル人自身が修道士に語っているところでは<sup>(a)</sup>、かの女はその後タルタル人のもとに長く滞在していた。かの女が自信をもって断言するには、前述の場所が世界の最果てに位置していて、その向うには大洋の海以外には陸地は見当たらないという。その地域では夏期に海から昇る太陽にあまりに近いので、太陽と天空に向い合っている関係から>あまりにも大きな轟音が聞え、<そのため、太陽がその黄道帯になかを南へ進むまでは、雷に撃たれたごとく即死したり負傷しないように>、ひとはだれも敢えて地上で戸外に住まないのである。太鼓の音で太陽の響きを遮るために、日の出のとき巨大な太鼓やその他の器具を<山の洞窟のなかで>激打することさえある。<この地方は山を通り過ぎると平坦であり肥沃である。しかし広大ではない>。

◇カルピニ V 章 16 節

(a)「タルタル人自身が修道士に語って」本書ではこのようにカルピニらがモンゴル人から話を聞いたことを示す文言が散見している。それに対して、対応するカルピニの V 章 16 節に「私たちが本当に確かなこととして聞いたところでは」(*ut nobis certissime dicebatur*)とあるように、カルピニは情報提供者に関してはほかした表現を用いている<sup>(49)</sup>。なお、前節において *sara irgen* というモンゴル語が紹介されていることも、両節の話がモンゴル人からのものであることを裏付けている。

(48) Cleaves 1959, p.39, n.93.

(49) 海老澤 1993/94 参照。



15 くさて、チンギス・カン<sup>(a)</sup>は敗北を喫して部下とともにこの地方から自国への道を急いでいたとき、その途中カスベイの山の方を眺めたが、以前に恐いめに遭っている<sup>(a)</sup>ので、その山には近付かなかった。しかし、以前にもあったように鉄器が山へとんでいくときの騒音がしたため、すでに山の人々が進んでいることが分かると、チンギス・カンはかれらと戦おうと思った。そして双方が互いに接近しはじめると、見よ、むかしエジプト人とイスラエルの子たちの間に<sup>(a)</sup>見られたように、雲が真真中に割って入って両者を分けたのである。かれらの山の人々は、主がその父祖のときにも示した[雲という]しるしによって保護し警告しているので、ユダヤ人であることは疑いない。タルタル人は雲に達するたびに、目が見えなくなったり、くあるいは死にそうにさえなったりしてさいなまれた。けれどもかれらは雲を通して自分たちを互いにある程度は見ることができた。さらに雲と対決している以上、2日かかっても雲のどちら側にも通り抜けられないことがわかると、タルタル人は道を見つけて退去しはじめた。

#### ◇カルピニV章15節

(a)「むかしエジプト人とイスラエルの子たちの間に」 かつてモーゼに率いられたイスラエル人がエジプトからの脱出をはかり、それをエジプト軍が阻もうと追いかけたとき、双方の間に神の使とともに雲の柱がたって互いに見えなくなったという。この話は『旧約聖書』出エジプト記14章19節・20節に見える。

16 こうしてタルタル人が行軍を続け、飢えに苦んでいると、一頭の動物の腹や内臓が手つかずのままく大変臭っているくに出くわした。くそれはかれらが以前ちょうどその場所で食事したときに食べるのこしたものだ、とかかれら自身思った。チンギス・カンのもとに届けると、その内臓を調理せよ、ただし、かさのある糞だけは、内臓をやぶったり傷つけたりしないように手で絞りだせ、

と命令を下した)。調理しおわると、チンギス・カンは、くいまにも餓死しそうであるかのように、部下と一緒にそれを貪り食った。そのあとでチンギス・カンは、中にある汚物の塊は別として、内臓はどんな部分も捨ててはならないと定めた。〈このことについては、タルタル人の習慣をとりあげるときにもっと詳しくのべよう〉。このようなことがあってから、チンギス・カンは自国に戻り、そして神の裁きにより雷に撃たれたのであった。<sup>(a)</sup>

◇カルピニ V 章 17・19 節

(a)「神の裁きにより雷に撃たれた」 本節およびカルピニ V 章 19 節の記述によると、チンギス・ハンが死んだのは西方遠征から帰国した後のことであり、死因は落雷ということになる。実際に死んだのはさらに西夏攻略を行ったあと(1227年)のことである。また死因は『元朝秘史』265節～268節では、落馬がもととなっている。当時のモンゴル人が雷鳴を恐れていたことは、ルブルク VII 章 1 節にも見えている。ジュヴァイニーは、モンゴル人は、雷に打たれた者が出た場合、その一族を 3 年のあいだ種族から遠ざけ、家畜の場合も数か月の間同様の処置をすると記している。雷に撃たれて死ぬというのは、いわば天罰が下ったのであり、よい死に方とは決して言えない。カルピニらに提供された情報がチンギス・ハンに対して非好意的立場からのものだからであろう。

17 ところで、インドに派遣されていたチンギス・カンの第 2 子麾下の第 2 軍は、小インドすなわちエチオピアに勝利を収めた。その地方には大変色の黒い異教徒が住んでいた。そして第 2 軍が大 [インド] く——使徒トマスがそこ<sup>(b)</sup>の人々を改宗させた——に達すると、一般にプレスピテル・ヨハネスと呼<sup>(c)</sup>ばれているその地方の国王は、〈全く予期していなかったにもかかわらず〉、た

---

(50) Boyle 1958, I, p. 205.

だちに軍隊を差し向けた。〈その軍隊は、タルタル人に対して聞いたことのないある新戦術<sup>(d)</sup>を用いた。すなわちとくに3000の〉兵士を指名してかれらの鞍の前の部分に一種の鉄製か銅製の像をすえ、その内部で火を燃やしたのである。〈タルタル人の矢がかれらのところに届くより先に〉、かれらは逆に革袋の鞆で風をおし火を放った。〈革袋は鞍の両側、両腿の下に備えられていた。火のあとから矢を放ちはじめた〉。このためタルタル人の軍隊は混乱<sup>(e)</sup>してしまい、ある者は焼かれ、またある者は傷ついて逃げ出した。そのあとをインド人が追いかけて多くのものを切り倒し、残りのものもかれらの領土から追いはらった。タルタル人はもはや2度とインドには行かなかった。〈このことについてタルタル人がわれわれの修道士に語ったところによると、インド人は襲撃のときに戦列を整え、馬上であぶみに足をかけて体を高くしたという。[さらにタルタル人は]「これは何だ、とわれわれが驚いていると、かれらは突然鞍の上に身を伏せたかと思うと、火がわれわれに向かって飛んできた。さらにかれらの矢がその後を追ってきた。こうしてわれわれの軍隊は逃げ出したのである」といった。タルタル人が引き上げて以来18年間、あるいはもう少し長く、一人も姿を見せなかった。インド人は、さきごろタルタル人のもとに使節を派遣してこういった、「おまえたちは、勇敢な兵士ではなく盗人のようにしてわれわれの領地に侵入してきた。しかし、今や知るがいい。われわれは毎日お前たちが侵入してくるのを待っているのだ。だから、もしお前たちがこちらへ来たくないなら、すぐこちらからお前たちのところへ攻め入るから待っておれ」と〉。

◇カルピニV章12節

- (a) エチオピア Ethiopia 小インドがエチオピアと言い換えられているのは、当時の西ヨーロッパでは、エチオピアも広義のインドの一部と見なされていたからであるが、<sup>(51)</sup> つねに小インドがエチオピアと解されていたわけではなく、

---

(51) Wright 1925, pp.302-304; Yule 1926, II, pp.431-432, n.1.

マルコ・ポーロの場合は中インドがエチオピアとされている。なおモンゴル軍が直接エチオピア人と戦ったことはない。

- (b) 使徒トマス インドに関して当時の西ヨーロッパでとくによく知られていたことは、この地で十二使徒の1人聖トマスが布教を行い、そして殉教したという<sup>(52)</sup>ことである。ここではインドの名を出したので、その枕詞的形容句としてこの一節を付加したものであろう。

- (c) プレスピテル・ヨハネス *Prespiter Iohannes* プレスピテル・ヨハネスとは、いわゆるプレスター・ジョンのこと。12世紀以後、西ヨーロッパにおいて東方のアジアに実在すると信じられていたキリスト教徒君主である。本節に見えるインドの国王のモンゴル軍に対する戦いぶりは、カルピニらに対する情報提供者がもともとプレスター・ジョンの事績として語ったものかどうかは、不確かである。当時の西ヨーロッパの知識人の間ではインドとプレスター・ジョンとは結び付けて理解されていたので、カルピニら側が、提供された情報では無名であったインドの国王になじみのプレスター・ジョンの名を付したことも考えられよう。

- (d) 新戦術 ボイル氏によれば、これには二つの異質な要素が含まれているとする。一つは、「アレクサンダー・ロマンス」中の1説話で、アレクサンダー大王がインドのボロス王の動物軍と対戦したとき、加熱して真っ赤にした人間のブロンズ像を用意し、攻撃をしかけてきた動物軍を退けたというものである。もう一つは、モンゴル軍はよく戦術として敵方に自軍を実際以上に大軍と思わせるために予備の馬を使ってダミーをつくらせたが、本節の背景にある<sup>(53)</sup>パルヴァーンの戦いでも、その戦術を採用したことであるという。ただし本節の話では、その戦術を使ったのは、モンゴル軍ではなくその相手方になっている。

---

(52) 伊東 1975.

(53) Boyle 1980, p.29.

(e)「タルタル人の軍隊は混乱し」 1221年にカーブルの北方のパルヴァーンで  
ホラズム・シャー国のジャラル・ウッディーン麾下の軍はシギ・クトゥク  
の率いるモンゴル軍と対戦し、激戦の末に敗走させた。本節におけるモンゴ  
(54)  
ル軍敗北の話は、この戦いのことが核になっていると考えられる。

18 また、タルタル人は、<sup>(a)</sup>〈チングス・カンの定めた期日より前に戻って死刑  
を宣告されないように、あえて自国には帰ろうとせず、東南の地方に進んだ。

1 か月以上も<sup>(a)</sup>荒野をさまよっているうちに、タルタル語でノホイ・カジャ  
ルという犬の土地に達した。すなわち、タルタル語のノホイは、ラテン語の  
“canis”《犬》であり、タルタル語のカジャルは、ラテン語の“terra”《土地》であ  
る。[その土地で]彼らは女だけは見つけたが、男は見当たらなかった。女た  
ちを捕らえ、土地の中央を貫いている流れの近くに2日間留まった。女たち  
に、男は〈何者であるか〉、どこにいるのか、とたずねると、男は生まれつき犬  
で、<sup>(b)</sup>敵がやって来ると聞いて、流れを渡って行ってしまった〉、と答えた。と  
ころが、〈3日目に〉その土地にいる犬全部が集まってきて姿を現した。タルタ  
ル人がかれらをからかうと、かれらは流れを渡り、砂利で身を包んだ。寒い時  
期だったので、その砂利が凍りついた。そして2度3度繰り返すと、〈犬は毛深  
いので〉、水分が砂利とともに凍結して、〈1尺掌の〉厚さになった。そうしてか  
らタルタル人に向かって突撃した。タルタル人は嘲笑し、矢を放って攻撃を  
開始したが、口と目以外は傷つけることができなかったのも、ごくわずかしが  
殺せなかった。ところが犬は素早く走り、〈一噛みで馬を倒し、もう一噛みでタ  
ルタル人を窒息させた〉。それで、犬に対しては矢でも剣でもやっつけることが  
できないと分かると、タルタル人は逃げ出した。犬はかれらを3日間追いか  
け、多くの者を殺し、かれらを自分たちの領土から追い払った。〈これ以後  
は、かれらはタルタル人から攻撃されることがなかった〉。あるタルタル人は

---

(54) Boyle 1958, II, pp.406-407.

〈B[ベネディクトゥス]修道士に〉、自分の父親はその時に犬に殺されたと語った。しかも同修道士はタルタル人のなかに犬の女が一人いるのを目撃したと確信している。〈彼の話によれば、その女はタルタル人との間に男の子をもうけたが、奇怪な格好だったという。前述の犬はたいへん毛深く、女の言葉が何でも分かり、女は犬の合図が分かる。もし女が娘を産むと母親のように人間の姿形をし、もし息子であると父親のように犬になるのである〉。

◇カルピニV章13節

- (a) ノホイ・カジャル Nochoy Kadzar 原写本には、Nothoy Kadzar とあるが、ペインター氏の訂正に従い、Nochoy Kadzar とする。Nochoy は、モンゴル文語の noqai, 現代ハルハ方言の нохой にあたり、「犬」の意味であり、Kadzar は、モンゴル文語の γaġar, 現代ハルハ方言の газар にあたり、「土地」の意味である。従って、この節の説明の通り、「ノホイ・カジャル」は「犬の土地」の意味である。<sup>(55)</sup> カルピニは、この名前については何も言及していない。ところで、『黒韃事略』には、「東北には妮叔と曰へるあり、那海益律于と曰へるあり。即ち狗國なり。男子は面目拳塊にして乳に毛有り。走ること奔馬に及ぶべし。女子は姝麗なり。韃これを攻めるも勝つこと能わざるなり」とあ<sup>(56)</sup>り、チンギス・ハンの時代モンゴル軍が敗れた国として、「那海益律于」すなわち狗國を挙げている。「那海」は上記の noqai にあたり「犬」を意味し、「益律于」は「益律干」の誤りでモンゴル語の irgen にあたり「民」を意味し、従って両方で「犬の民」の意味である。<sup>(57)</sup> 「土地」か「民」かで表現が若干異なるが、モンゴル軍が背走したことなど内容的に見てまさに本節のノホイ・カジャルに当たる。この「犬の民」との戦いについては、『集史』『元史』『元朝秘史』には全く言及されておらず、オゴデイとグユクの宮廷を訪れた者の記録、すな

(55) Painter 1965, p.70, para. 18, n.2; Poppe 1967, pp.9-12; Sinor 1970, pp.541-542, 545.

(56) 王 1940, 26a.

(57) Pelliot 1963, p.685.

わち本書、カルピニの報告書、『黒韃事略』、アルメニア王ヘトゥムの旅行記にのみ現れるという特徴があり、この時期に宮廷で流布していた話らしい。

- (b)「男は生まれつき犬で」人間の妻を持った犬の夫の住む土地については、東西の史料に類似した記事があることが知られている。前注で言及したもの以外に、胡嶠『陷虜記』（『契丹國志』巻25、『新五代史』巻73所収）、周致中『異域志』『狗國』の条、8世紀末から9世紀初頭の北方の情勢を伝えたとされるペリオ氏将来のチベット語敦煌文書（Pelliot tibétain 1283）、『集史』『オグズ史』の「オグズの Qil-Baraq との戦い」の記事があり、いずれにも人間の妻と犬の夫の話が記されている。<sup>(58)</sup>この中で、カルピニとブリディアの記事と内容的に関係があるものとしてペインター氏が重視したのは、『集史』『オグズ史』の「オグズの Qil-Baraq との戦い」と敦煌文書1283である。まず、『集史』の「オグズの Qil-Baraq との戦い」の記事は、その地方で犬の姿をした男が、人間の姿をした女を妻としていることを伝えるだけでなく、次のような本節と非常によく似た犬の男の戦法を伝えている。<sup>(59)</sup>

「Qil-Barāq は、暗黒の地方にある州である。その部族の男は黒い皮膚を持ち、醜い顔をしている。女はきれいな顔をしている。オグズがかれらの近くに至ったとき、9人の騎兵を使者としてかれらのもとへ送り、次のように伝えた。「大部分の都市と隣接地域と低い地方が我々に服属し、貢物することに同意した。もしお前たちも服属することに同意し、貢物を納めるならばよろしい。そうせずに、戦争の準備をし、戦って抵抗するならば、我々は急遽進攻しよう」と。かれらは使者らに返答して言った「もし、お前たちが9人がかりで我々の2人と戦うことができ、お前たちが勝ったならば、貢納することに同意しよう。もしお前たちが逆に討たれて負けたならば、お前たちの

(58) Pelliot 1963, pp.685-688; Painter 1965, p.70, para.18,n.3; 森安孝夫 1977, pp.7, 2.

(59) カルピニと『集史』『オグズ史』に、犬の男について非常に類似した記述が見られることは、リッシュ氏が指摘した（Risch 1930, pp.127-128）。「オグズ史」のテキストとしては、Rashid/Saltykov 2458, fol.276aを用い、Jahn 1969, p.24を参照した。

首を落とすぞ」と。使者たちはその屈辱的な取り決めに拒否して言った「我々の2人がお前たちの2人と戦おう」と。かれら(Qīl-Barāq 人)の習慣は次のようであった。かれらは、いつも戦いのために2つの池を用意し、一方は黒い膠で満たし、もう一方を白い膠で満たした。戦いの時に、白い膠の池に裸で入ると、膠がかれらの毛にくっついた。かれらはそこから出て、白い砂の中で転げ回った。再び、黒い膠の池に入り、黒い砂の中で転げ回った。この[膠と砂の]練りものが、かれらの体の上で、3度乾くと、どんな武器もかれらの体に役に立たなくなった。とうとう、その2人の使者は殺された。7人は、戻って事の次第をそのようにオグズに報告した。オグズは躊躇することなくかれらへ向かって行き、かれらと戦った。敵方が勝ち、オグズの軍隊のうち多数の者が殺され、残りは散り散りになった。オグズは、戦うことに利はないだろうと悟り、退却した。

トルコ語で、“kil”(<Qīl)は「毛」を意味し、“barak”(<Barāq)は「毛の長い犬」を意味するので、Qīl-Barāqの醜い顔の男とは、人間の妻を持った「毛の長い犬」のことである。砂と膠で身をまとうかれらの戦法は、本節の氷で身をまとう戦法と非常に似ており、従って明らかに「集史」オグズ史の「Qīl-Barāq」の記事と、ブリディアの「ノホイ・カジャル」の犬の男の記事およびそれに対応するカルピニの記事は、同じ起源を持つ説話であり、チンギス・ハンの遠征中に実際に起こった事件ではありえない。「オグズ史」の「Qīl-Barāq」とそれに続く「暗黒の土地」の記事については、「アレクサンダー・ロマンス」の影響を受けていることが明らかにされている。<sup>(61)</sup>一方、前述のように敦煌文書(Pelliot tibétain 1283)にも、本節と類似する犬の男と人間の女の話が現れることが知られており、ペインター氏はこの敦煌文書も「アレクサ

(60) Painter 1965, p.71, para. 18, n.3; Clauson 1972, pp.360, 614.

(61) Erdmann 1862 (未見。エルドマン氏の指摘についてはペインター氏が言及している); Pelliot 1963, pp.617-618; Painter 1965, pp.70-71, para. 18, n.3; Boyle 1974, pp.222-224, Boyle 1980, p.24.



ンダー・ロマンス」の影響を受けていると主張している。以上の分析にもとづいて、ペインター氏は、本節は前後のチンギス・ハン遠征の記事と同じく、「アレクサンダー・ロマンス」の影響を受けているとする。<sup>(62)</sup>

ペインターの論証のうち、敦煌文書1283と「アレクサンダー・ロマンス」との関係に関する部分はやや根拠が弱く、また、『黒韃事略』の記事には気づいていない。上記の諸史料に見られる「犬」に関する記事がすべて「アレクサンダー・ロマンス」に由来するかどうかは、現段階ではまだ未確定であるが、少なくとも、『集史』『オグズ史』とプリディアおよびカルピニの記事は、「アレクサンダー・ロマンス」の影響を受けている可能性が高い。

19 タルタル人はこの土地から自国へ戻るとき、プリテベット<sup>(a)</sup>と呼ばれる地方を占領した。〈Burithとは、“lupus”《狼》のことで、その土地の住民にふさわしい名称である。というのは、あたかも荒れ狂う狼のように〉、父親が死ぬと親類が集まって食べてしまう習慣があるからである。この人たちには髭がないが、もし毛が生えてくると、そのために作った鉄製の毛抜きでそれを抜き取るのである。その上、かれらはすこぶる醜い。

#### ◇カルピニV章14節

(a) プリテベット Burithabet カルピニの対応する箇所には“Burithabet”と表記されており、それとは別にVII章9節に“Buritabet”として出てくる。カルピニには語釈は付されていない。突厥碑文、ウイグル文書などの古代トルコ語において、“böri”は「狼」を意味するので、この語釈は、トルコ語として解釈されたと考えられる。<sup>(63)</sup>ただ、サイナー氏が指摘するように、Buri「狼」+ thebet「チベット」とせず、Burith=「狼」としているの点は、語釈の正誤は別として

---

(62) Painter 1965, pp.49–51,70–71.

(63) Painter 1965, p.72,para.19,n.1.

不正確である。<sup>(64)</sup> ブリ・テベットという地名は、この他に、ケレイト族のオン・ハンの息子センゲンが逃走した地名として『集史』と『聖武親征録』に出てくる。『集史』には「オン・ハンの息子のセンゲンは、彼の父親が捕らえられ殺された頃、逃げ出して外へ逃走した。そして、イシク・バルガスンという名前の村を通り過ぎた。その村は、荒野の端にあり、モンゴル地方の周辺にある。そして、ブリ・テベット Buri-Tebet すなわちチベット地方に入り、<sup>(65)</sup> その地方のいくつかを略奪した」とあり、『聖武親征録』には、漢字転写した形で、「亦剌合は西夏に走り、亦即納城を過ぎ、<sup>(66)</sup> 波黎吐蕃部に至る」とある。ベリオ氏は、このブリ・テベットを、青海の西方のツァイダム地方、あるいは東方の西寧地方を指すとしており、<sup>(67)</sup> アンビス氏もそれに従った。<sup>(68)</sup>

チベット人が父親の亡骸を食するという習慣については、これとほぼ同文のカルピニの記事以外に、ルブルクとオドリコの著作にも類似した記事が見られる。ただ、ルブルクは、亡くなった親類を食するという習慣が過去にあったと記している点で(IX章3節)、オドリコは、父親が亡くなると、息子は亡骸から頭を切り落とし、体を鳥葬にしたあと、頭を料理して食する(XX XIII章5節)としている点で、相違がある。

20 また、チングス・カンの息子トスク・カン<sup>(a)</sup>とともに西方に向かった第3軍は、<sup>(b)</sup>最初に、<sup>(c)</sup>ピセルミン人に<sup>(d)</sup>テルケメンと呼ばれている地方を、ついで<sup>(e)</sup>カンギト人を<sup>(f)</sup>征服した。最後に<sup>(g)</sup>クスブク人の<sup>(h)</sup>土地すなわち<sup>(i)</sup>コマニアに侵入した。く<sup>(j)</sup>コマン人は<sup>(g)</sup>全<sup>(h)</sup>ルシ人と<sup>(i)</sup>連合して2つの川——その1つの名は<sup>(i)</sup>カルクであり、もう1つは<sup>(j)</sup>コニウズ、すなわち羊の水、タルタル語でコニはラテン語の“oues”

(64) Sinor 1970, pp.540-541.

(65) Rashid/TS 1518, fol.172b. この地名が『集史』にもあることについては、Risch 1930, p.128,n.3に指摘がある。

(66) 王 1940, 52a; Painter 1965, p.72, para. 19, n.1.

(67) Pelliot 1920, pp.182-9.

(68) Becquet & Hambis 1965, p.156.

《羊》であり、ウズムは“aqua”《水》である——の近くでタルタル人と戦い、敗北を喫した。戦いに参加した者が報ずるところでは、血が双方から溢れ出て、馬のくつわに達するほどであったという。タルタル人はそこで勝利を収めてから自国に戻りはじめたが、その途中北方でバスタルク人<sup>(k)</sup>を、すなわち大フンガリアという地方を占領した。〈そこは北方で大洋の海と接している〉。

◇カルピニ V 章 11・29 節

- (a) トスク・カン Tossuc can チングス・ハンの長子ジョチのこと。11節注(a)トスク参照。オールセン氏は、この記事とジュズジャーニーの記事に基づいて、ジョチが、ウルゲンチを陥落させた戦いが終わったあと北方に向かい、ブルガル族やカングリ族などを攻撃し、さらに、コマン族の住むコマニア(キプチャク草原)に侵入したことは確かであり、その後、ジョチは戦列から離れ、東方へ退却したと考えた。<sup>(69)</sup> 1221-1224年のロシア遠征について、モンゴル側の情勢については、オールセン氏のこの研究があり、ロシア側の情勢<sup>(70)</sup>については、フェネル氏の研究が詳しい。
- (b) ビセルミン人 Bisermini これは、ペルシア語でイスラム教徒を意味する<sup>(71)</sup> “Muslim”またはその複数形“Muslimān”が転訛したものと考えられているが、むしろもう一つの複数形“Muslimīn”が訛ったものと考えた方がよいと思われる。34節にも Bisermini とあるが、24節には Bisermeni の属格形 Bisermenorum が出てくる。Bisermini の方がペルシア語の形に近い。この「イスラム教徒」とは、特にホラズム・シャー国内のイスラム教徒を指している。
- (c) テルケメン Terkemen 25節には、Tercomen とあり、カルピニには、“Turcomani” (VII章 9 節) とある。いずれも「トゥルクメン Türkmen」を指す。トゥルクメンとは、ムスリムとなったトルコ系の人々で、イスラム世界に進

(69) Allsen 1983, pp.12-13.

(70) Fennell 1980; Fennell 1983, pp.63-68.

(71) Painter 1965, p.72, para.20, n.3; Becquet & Hambis 1965, p.164, n.101.

出して以後も部族集団を保持していた。1221年2月に、トルイの部隊は、マルヴ Marv 近くでトゥルクメンのキャンプに夜襲をかけこれを打ち破った。部隊を率いる者が、ジョチカトルイかで異なるが、この事件が本節の記事と関連があるかもしれない。<sup>(72)</sup>

(d) 「最初に、ビセルミン人にテルケメンと呼ばれている地方を」 ペインター氏は、この部分を「最初にテルケメンと呼ばれている地方を、2番目にビセルミン人を」と訳したが、これは上のように読むべきだとするリシャル氏の指摘がある。<sup>(73)</sup>

(e) カングト人 Kangitae カルピニには、Kangit (VII章9節) と Kangite, Kangitarum (主格形と属格形, IX章22-23節) の2種類が見られる。この Kangit ないし Kangite は、ルブルクの Cangle (XIX章4節, XX章7節, XXI章6節) に当たるとされており、ともに、トルコ系の遊牧民カングリ Qangli を指すと考えられている。カングリ族は、当時カスピ海北方のウラル河から、アラル海東北ないし東方のカラクム砂漠にかけて居住していた。<sup>(74)</sup>

(f) クスブク人 Cuspcae コマニアに居住する部族について、34節には「コマン人、彼らは自分たちを Kusscar と呼んでいる」とある。この Cuspcae と Kusscar は、同じものに由来すると考えられ、ペインター氏は、両者ともコマン人の別名である「キプチャク Kipchak」の壊れた形と見ている。<sup>(75)</sup>

(g) コマン人 Comani トルコ系の遊牧民。この遊牧民は、イスラム史料では「キプチャク Qipčāq」, ロシア語史料では「ポロフツィ Polovci」と呼ばれることが多いが、ラテン語史料では、「コマン人 Comani」, 「クマン人 Cumani」と呼ばれる。<sup>(76)</sup>

---

(72) Boyle 1968, p.313.

(73) Painter 1965, p.72; Richard 1967, p.243.

(74) Jackson 1990, pp.128-129; Allsen 1983, p.6.

(75) Painter 1965, p.72, para.20, n.5.

(76) これについては、Golden 1992, pp.270-282; Pritsak 1982に詳しい。

- (h) ルシ人 Rutheni 当時の Rutheni/Ruteni は、東スラブ系の民族を指す一般的な名称であった。<sup>(77)</sup>
- (i) カルク Calc 古代ロシアの年代記では、このときの戦闘があった川の名は、『イパチー年代記』には「カルカ川 река Калка」, 『ノブゴロド第一年代記』には「カラク川 Калакъ река」とある。<sup>(78)</sup> ペインター氏は、この川は、現在アゾフ海北岸のタガンログ湾 (Таганрог) に注いでいるカルミウス川 (Кальмиус) の支流の一つであるカルチク川に当たるとするが、フェネル氏は、カルミウス川の支流であると述べるに止まり、支流のどれであるかは特定していない。<sup>(79)</sup>
- (j) コニウズ Coniuzzu 川の名前としては、「コニウズ Coniuzzu」と表記されているが、説明の部分では「コニ coni」+「ウズム vzzum」と表記されており、語末に m を伴う。モンゴル語では、“qoni”が「羊」, “us”が「水」ないし「川」を意味する。ペインター氏は、この川を、上記のカルミウス川に当てている。<sup>(80)</sup>
- (k) バスタルク人 Bastarchi カルピニには、「それから、さらに北方へ、バスカルト Baschart すなわち大フンガリア Hungariam Magnam へ進軍し、彼らを征服した」(V章29節)とあり、ベネディクトゥスの *Relatio Fr. Benedicti Poloni* には、「古いハンガリー人 antiqui Ungari であるバスカルド人 Bascardi」(7節)とある。ルブルクには、「大フンガリア maior Hungaria であるパスカト Pascatu」(V章5節)とあり、その他、XXI章1, 3, 5節にはパスカトル“Pascatur”と、XXIX章46節には“Pascaver”とある。これらは、いずれもウラル山脈西麓、ウラル河上流に居住しているバシユキール人 Bashkir のことであり、そこはハンガリー人の居住地と考えられていたため、「大フンガリア」と呼ばれ

(77) Jackson 1990, p.68,n.2.

(78) Fennell 1980, p.24; 延広 1992, pp.18, 20.

(79) Painter 1965, pp.72-73, n.6; Fennell 1983, p.66.

(80) Painter 1965, pp.72-73, n.6; Poppe 1967, pp.7-8; Sinor 1970, p.541,550参照.

(81)  
ていた。ベリオ氏は、上記のラテン語表記を、Pascacur, Pascakir の誤りだと  
するが、ゴールデン氏によれば、「バシュキール Bashkir」は、イスラム史料  
では、Basjirt (al-Iṣṭakhrī), Bāshjird, Bāshghird, Bashqird (Ibn Faḍlān, Yāqūt 等),  
Bāshghirt (Juvainī), Bajghird (al-Mas'ūdī) と表記されているという。(82)  
イスラム史料のどの表記も語末に t, d を伴うので、ラテン語史料に見られる様々な表  
記のうち、おそらくカルピニの「Baschart バスカルト」、ベネディクトゥスの  
「Bascardi バスカルド人」が、もっとも原語に近い表記であろう。

21 かれらはこの地方を出てパロスキト人<sup>(a)</sup>のところに達した。この種族はく長  
身であるが瘦せて虚弱であり、おなかが小さく丸く、くちっぽけなカップのよ  
うである。かれらは全く食事をとらないで、湯気を常食としている。すなわ  
ち、く口の代わりに小さな穴があり、蓋をした鍋で肉を煮つめ、湯気があが  
ると、それを小さな穴で吸いとりて養分としている。くしかし肉は大事にしないで  
犬に投げ与える。タルタル人は、怪異なものを大変嫌うので、このような種族  
にはかかずらわなかった。この後、かれらはザモゲド人<sup>(b)</sup>と呼ばれる種族のとこ  
ろに達した。くしかし、この人々のことは問題にできなかった。というのは、この  
人々が貧しくて野蛮であり、ただ狩猟だけに頼って食べていたからである。最  
後にくウコルコロン<sup>(c)</sup>といわれる種族のところにやってきた。くタルタル語のウ  
コルはラテン語の“bos”《牛》であり、コロンは“pedes”《脚》である。つまり牛の  
脚である。その種族は、またノホイテリム<sup>(d)</sup>ともいう。ノホイは“canis”《犬》、テ  
リムは“caput”《頭》、つまり犬頭である。要するにラテン語でいえば、“canina  
capita”《犬頭》である。かれらは、くるぶしから下が牛の脚であり、く後頭部か  
ら耳までは人間の頭であるが、全体として犬のような顔になっている。くその  
ため、その醜い部分からこのように名づけられたのである。この人々は、ふた  
こと話すと三つ目には吠えるので、くその意味でも犬と名づけることができる。

(81) Jackson 1990, p.86, n.4.

(82) Pelliot 1950: p.145, n.1.; Golden 1992, pp.262-263.

そしてかれらは野蛮で走るときにはかなり素早い。タルタル人は、やはりこの人々を侮っていた。こうして自国に戻ってきてから、かれらはチンギス・カンが雷に撃たれたことを知った。

◇カルピニ V 章 30・31 節

- (a) パロスキト人 Paroscitae カルピニには Parossitae (VI 章 30 節, IX 章 20 節), Parossiti (VII 章 9 節) とある。ペインター氏によれば、これはバシユキール人より北方のウラル山脈に居住していたフィン系の民族 Permiak を指すが、パロスキト人に関する上述の奇妙な習慣と類似した話はプリニウス『博物誌』7 卷 2 節にも登場するので、この話が史実だとは考えられないという。<sup>(83)</sup>
- (b) ザモゲド人 Zamogedi カルピニには Samogedi とあり (VI 章 31 節, VII 章 9 節, IX 章 20 節), おそらくウラル系の民族に属する Samoyed を指すと言われている。なお、サモエード人は、14 世紀後半に書写されたロシアの『ラヴレンチー写本年代記』には「サモヤヂ Самоядь」と記されている。<sup>(84)</sup>
- (c) ウコルコロン V <co>rcolon “Vcor” はモンゴル文語の“üker” に当たり「牛」を意味し, “colon” はモンゴル文語の“köl-ün” に当たり, 「脚の」の意味であり, 従って, 「ウコルコロン」は, 「牛の脚の (土地, 人々)」の意味である。<sup>(85)</sup> これに類似したものとして「馬脛」「馬蹄」という表現を含んだ部族名・国名がしばしば中国史料に見られ, これはスキーを使用していたことを示すと考えられている。<sup>(86)</sup> ところで, 本節では「犬の頭」と「牛の脚」がミックスされており, それとは別に 18 節に「犬の土地」の話がある。この「犬」「牛の脚」という 2 つの伝説的要素は, カルピニおよびブリディア, チベット語敦煌文書 (Pelliot tibétain 1283), 胡嶠『陷虜記』(『契丹國志』卷 25, 『新五代史』卷 73 所

(83) Painter 1965, p.74, para.21, n.1; プリニウス『博物誌』7 卷 2 節 [25] 「アストミ種族」参照。

(84) Painter 1965, p.74, para.21, n.2; 國本・山口・中条 1987, pp.254, 506; 木崎 1969, p.55.

(85) Poppe 1967, pp.8-9; Sinor 1970, pp.541, 549.

(86) 白鳥 1970, pp.630-631; 森安孝夫 1977, p.31.

収)に2つとも登場する要素である。これらが共通の起源にさかのぼりうるかどうかは非常に興味深い問題であり、結論は今後の研究に委ねたい。<sup>(87)</sup>

- (d) ノホイテリム Nochoyterim “nochoy”は、モンゴル語文語“noqai”に当たり「犬」を意味し、“terim”は、モンゴル語文語の“terigün”,『元朝秘史』の“teri'ün”に当たり、「頭」を意味するので、「ノホイテリム」は、この節の語釈<sup>(88)</sup>にあるように「犬頭」の意味になる。

22 さらに、タルタル人が、われわれの修道士に語ったところによると、1本の脚、1本の手しかない人々の地方に行ったことがあり、〈その人々があまりに素早く、弓も強いので、何の損害も与えることができなかったという〉。すなわち、彼らは、1人が弓を持ち、もう1人が、〈どんな種族よりも強い〉矢を放ち、素早さの点ではくよその地方の人々ばかりでなく、地上のどんな四つ足にも勝っているといわれている。われわれの修道士がタルタル人のところにやって来る前に、上記の人々のところから父子2人がタルタル人の皇帝の宮廷に来てこういった、〈「どうしてわれわれを戦で困らせようとするのか。矢を放ったりすばしっこく走ったりすることにかけは、われわれの方があなた方より上ではないか」と。彼らと人前で競争させるためにとびきり速い馬が選定され、その馬をフルスピードで発走させた。しかしかれら自身も不思議なやり方でいっそう速く車輪のように転がりはじめ、たちまち馬に追いついてしまった。最後には、かれらは馬とタルタル人に背を向けて、自分の土地へ走り去った。タルタル人はこれを見てからは、もはやその人々を攻めようとはしなくなった〉。なお、その人々はく“vnipedes”<sup>(a)</sup>〈1本足〉と呼ばれている。

#### ◇カルピニV章33節

---

(87) ベリオ氏は、カルピニと『陷虜記』の記事を比較をしており、森安氏は、1283文書と『陷虜記』の両者に、犬人国、牛蹄国、巨人国の3要素が共通していることを指摘した(Pelliot 1963, p.686; 森安孝夫 1977, p.28)。

(88) Poppe 1967, pp.9-11; Sinor 1970, pp.545-548.



(a)「その人々は“vnipedes”《1本足》と呼ばれている」 カルピニでは、上の21節と22節に対応する話が、バトゥの遠征の後ろに書かれている。それに対して本書では、「アレクサンダー・ロマンス」などに由来する伝説的な記事(12, 13, 14, 15, 17, 18, 21, 22の各節)は、すべてチングス・ハンの遠征の部分に集中している。海老澤がすでに指摘したように、全体的に見て、本書の方が内容が年代順にそっており、彼らが利用したと思われる資料の元の形に近い。おそらく、カルピニは、報告書を作成する段階で、この部分をバトゥの遠征の後ろに回してしまったのであろう。そこで、よりオリジナルに近い本書にもとづいて、伝説的な記事がどのように挿入されているかを、本書全体の構成の中で考えてみると、(1)チングス・ハンの遠征の部分にホラズム・シャー国遠征の事実が完全に脱落し、そこに伝説的な記事が挿入されていること、(2)ホラズム・シャー国征服の話は、バトゥの遠征の箇所(24節)に挿入されていること、この2つが表裏一体の関係にあることが理解される。従って、カルピニやベネディクトゥスが利用した資料というのは、特定の部分が削られそれが別の箇所に挿入されるという改変を受けたものだったのである。<sup>(89)</sup>

23 そのころ、チングス・カンの子オコダイが<sup>(a)</sup>、ほかの人々の推挙によって彼の皇帝権を継承した。チングス・カンは4人の息子を遺した。すなわち彼の後継者となった<sup>(b)</sup>オコダイそしてトスクとスカハダイであるが、4人目の名前はく修道士からも他の人からも聞いていない。オコダイには3人の息子、すなわち現在のカン——つまり皇帝——であるクク<sup>(c)</sup>とコクテン<sup>(d)</sup>と後述のキレネン<sup>(e)</sup>がいる。第2子トスク・カンの子にはバティ<sup>(f)</sup>(この人はカンについて勢力がある)とオールドウ<sup>(g)</sup>(この人は指導者の中では年長であり、くとくに尊敬を集めている)がいる。トスクはく別の后から<sup>(h)</sup>他に2人の子、すなわちシバン<sup>(i)</sup>とカウトを得て

(89) 海老澤 1993/94, 補遺56頁を参照; Painter 1965, pp.49–51, 76, para.22.n.1.

いる。第3子スカハダイの子には、カダン<sup>(j)</sup>とブリ<sup>(k)</sup>がいる。第4子(その名前は聞いていない)の子にはメンゲ<sup>(l)</sup>(この人は年長であり)、その母親はセレクタム<sup>(m)</sup>といい、タルタル人の中では皇帝の母親に次いで高名であり、バティを除けばもっとも勢力があると、もう一人ベカク<sup>(n)</sup>がいる。ほかの息子たちの名前は聞いていない。さらに次にあげるのは、指導者の名前である。オールドウ(この人はポーランドを経てハンガリアに入った)、バティ、ブリ、カダン、シバン、ブギエク<sup>(o)</sup>(この人たちはハンガリアにいた)、キルボダン<sup>(p)</sup>(この人は今でもダマスクスのスルタンと戦っている)。しかし、タルタル人の土地には、メンゲとクコクテンとシレネンと、そのほか名前を記すまでもない多数のものが残っていた。

◇カルピニV章20・21・25章

- (a) オコダイ Occoday チンギス・ハンの第3子オゴデイ Ögödei. モンゴル帝国の第2代ハン(在位1229-41)。ここでは、オゴデイがチンギス・ハンの後継者となったため誤って長子と見なしており、そのため、ジョチ<sup>(90)</sup>が第2子、チャガダイが第3子となっている。
- (b) スカハダイ Schahaday チンギス・ハンの第2子チャガダイ Čayadai.
- (c) クユク Cuiuc オゴデイの長子グユク Güyüg. モンゴル帝国の第3代ハン(在位1246-48)。
- (d) コクテン Cocten オゴデイの第2子コデン Köden.
- (e) キレネン Cyrenen オゴデイの第3子クチュの息子シレムン Širemün にあたる。クチュは若くして死去し、シレムンがオゴデイの後継者候補となっていたため、ここでは誤って、シレムンをオゴデイの第3子としている。

---

(90) この節の人名の比定については、Painter 1965, pp.76-78, para.23があり、対応するカルピニの箇所 (Menestò 1989, pp.265-266) の人名については、次の研究に詳しい。Wyngaert 1929, p.66; Risch 1930, pp.138-140; Becquet & Hambis 1965, pp.158-161; Pelliot 1973, p.37-38; 護 1965, pp.100-101; Menestò 1989, pp.444-447.

- (f) バティ Bati ジョチの第2子バトゥ Batu.
- (g) オルドゥ Ordu ジョチの長子オルダ Orda.
- (h) シバン Syban ジョチの第4子シバン Šiban.
- (i) カウト Chauth ここではジョチの息子としてバティとオルドゥ以外に、シバンとカウトの2人を挙げているのに対し、カルピニではバティとオルドゥ以外に4人を挙げている。そのうち、シバン Sibān, ボラ Bora, ベルカ Berca に続く4人目が、この Chauth に対応すると考えられている。その4人目の綴りは、Thauhe, Chant, Tharet, Tauht, Tanht, Tauth と写本間で異なる。『集史』に記されたジョチの息子13人のうち、シバンは第5子 Shībān, ボラは第7子 Būvāl, ベルカは第3子 Berke, 問題の4人目は、第6子 Tānkqūt に当たるとされている。
- (j) カダン Cadan オゴデイの第5子にカダアン・オグル Qada'an Oγul がおり、ここではそれをチャガダイの息子と間違っているらしい。
- (k) ブリ Buri チャガダイの第2子モエトゥケンの第3子ブリ Būri. モエトゥケンは父親より早く死去したため、ここでは誤ってブリをチャガダイの息子としている。
- (l) メング Mengu トルイの長子モンケ Möngke.
- (m) セレクタム Serectam トルイの第一夫人のソルクタニ・ベキ Sorqoqtani Beki. ケレイト族出身。
- (n) ベカク Bechac カルピニの諸写本には、Bichac, Byechyac, Bethac, Betach, Bethas, Bechav, Becas とあるが、トルイの息子に該当する人物はいない。トルイ家関係者の名前が、ソルクタニ・ベキとモンケ以外伝えられていないことは、クビライとフレグとアリク・ブケが、『集史』『元史』においてモンケの即位以前はほとんど登場しないことと符合しており、オゴデイおよびグユクの宮廷におけるトルイ家の特殊な状況、とくにトルイ死後のトルイ家の微妙な立場を反映していると考えられる。
- (o) ブギエク Bugiec カルピニの諸写本には、Dinget, Duchet, Buiget, Buygeth,

Burech とあるが、いずれにしろ遠征に参加したメンバーの名前とあまり一致しない。しかし、本書の Bugiec であれば、ペインター氏が訳したように、遠征に参加したトルイの庶子ブジェク Būjek (『元朝秘史』277節)に当たると考えられる。

- (p) キルボダグン Cyrbodan スニト族出身のチオルマカン Čormaqan (『集史』ではチオルマグン Chūrmāghūn) のこと。バトゥの遠征より前の1228年に、モンゴル帝国の辺境を防備するための駐屯軍であるタマチ軍を率いて、イランに派遣された。<sup>(91)</sup>

24 ところで、〈オコダイは軍勢の点で勝っており〉、父の軍隊から3軍を編成した。第1は、兄弟の子バティを長とし、〈西の方面へ、神の教会とあらゆる西方諸国に向けて派遣した〉。バティは、その途次、大スルタン<sup>(a)</sup>の土地とビセルメン人<sup>(b)</sup>の土地を従えた。そこの人々は、サラセン人であり、コマン語を話す。そこでは、長期戦となったが、バルチン<sup>(c)</sup>という特に堅固な都市を占領した。一方、ヤンキント<sup>(d)</sup>という別の都市は、自発的に降参したので、バティは破壊はしなかったが、〈タルタル人の流儀により〉、略奪を加えて〈貴族を〉殺害し、その都市によその人々を住まわせ、前からの住民を他へ移住させた。そしてバティは、大都市オルナス<sup>(e)</sup>へ向かった。そこには、キリスト教徒のガザル人<sup>(f)</sup>やアラン人<sup>(g)</sup>、その他いろいろな地方出身のサラセン人が大勢住んでいた。その都市は、河の辺にあり、その河は、河口部分が海のように大きく、その都市を貫いていた。タルタル人は、上流部で流れをせき止めた上で、水を勢いよく溢れさせ、その都市にあるものを何もかも水没させた。

◇カルピニV章25・26節

- (a) 大スルタン Altisoldani カルピニのV章25節、IX章23節にも Altisoldani,

---

(91) 志茂 1980, pp.17-18; 松田 1987, p.46; 松田 1992, p.94.

Altisoldan とある。従来の説によると、この“Altisoldani”は、“Altus Soldan”の  
(92)  
属格形と考えられ、「大スルタン」の意味になる。

ところで、従来の研究によれば、この大スルタンとは、ホラズム・シャー  
国のスルタンのことであり、その後ろに続く地名は西トルキスタンの同国支  
配下の都市名である。この節は全体として、ホラズム・シャー国への遠征と  
勝利を述べている。しかし、バトウの遠征の時には、すでにホラズム・  
シャー国は存在しなかったのであり、従来から何らかの誤りがあるとされて  
きた。例えば、リッシュ氏は、カルピニがチングス・ハン時代の遠征とオゴ  
デイ・ハン時代の遠征を混乱したとする。つまりリッシュ氏は、「大スルタ  
ン」をホラズム・シャー国のアラー・ウッディーンとみなしたのであるが、  
ペリオ氏はそれに反対して、オゴデイ・ハンの時代にチオルマカンの追討に  
よって死去した息子のジャラル・ウッディーンであろうと主張した。ペイ  
ンター氏は、カルピニが、ジョチの遠征とバトウの遠征を混乱したと考え  
(93)  
た。しかし、カルピニとプリディアの2つの著作全体を通じて考えてみる  
と、注目すべき点は、ホラズム・シャー国についての遠征の記述が、著しく  
史実とかけ離れているという点であろう。すなわち、チングス・ハンの遠征  
の部分には、「アレクサンダー・ロマンス」等が導入され、ホラズム・シャー  
国は出てこない(22節注(a)参照)。また、オゴデイ時代にジャラル・ウッ  
ディーン追討のために派遣されたチオルマカンの軍隊についても、派遣の目  
的をキルギス遠征にすり替えている(本書31節)。そして、その代わりとし  
て、バトウの遠征の箇所にはホラズム・シャー国征服の話が登場しているの  
である。すでに22節で指摘したように、これは単にカルピニやベネディクトウ  
スが情報を混乱したのではなく、彼らの利用した何らかの資料においてす  
(94)  
で史実が改変されていたためと考えられる。

(92) Rockhill 1900, p.15; Pelliot 1973, p.39.

(93) Risch 1930, p.147, n.2; Pelliot 1973, p.40; Painter 1965, pp.78–79, para.24, n.2.

(94) 海老澤 1993/1994, 補遺56頁を参照。

- (b) ビセルメン人 Bisermeni イスラム教徒のこと。20節注(b)「ビセルミン人」の項参照。
- (c) バルチン Barchin シルダリア河畔にある都市。アルメニア王ヘトゥムの旅行記には P'arčin とあり、『聖武親征録』および『元史』巻1太祖16年の条には「八兒眞」とある。これは、『世界征服者の歴史』の Bārjligh-Kent に当たる<sup>(95)</sup>とされている。1220年にジョチがこのバルチンと次のヤンキントを攻めて陥落させた。カルピニとベネディクトゥスは、この2都市を通過している(カルピニIX章23節、ベネディクトゥス8節)。
- (d) ヤンキント Iaṅkint シルダリア河下流域の Yangi-Kent のこと。『聖武親征録』および『元史』巻1太祖16年の条には「養吉干」とあり、『集史』には Yankī-Kent とある。
- (e) オルナス Ornas オルナスについては、オトラル、タナに当てる説もあるが、ペインター氏は詳細な考証の結果、アム河下流域のウルゲンチ Urgendj に当<sup>(96)</sup>たと結論した。
- (f) ガザル人 Gazari Khazar 人のこと。7世紀の中頃に黒海からカスピ海北岸にハザール・ハン国を建てたトルコ系の民族。ハザール・ハーン国といえは、ユダヤ教への改宗が有名であるが、ハザール・ハーン国には、イスラム教徒<sup>(97)</sup>やキリスト教徒もあり、ギリシア正教の布教が行われていた。
- (g) アラン人 Alani 紀元1世紀頃からカフカーズ山脈およびその北方のステップ地帯に居住していたイラン系の民族。現在カフカーズ山脈に居住している Osset 族の祖先。モンゴル帝国期のイスラム史料に Ās, 『元朝秘史』に「阿速惕(Asut)」(262, 270, 274節), 『元史』に「阿速」「阿思」と記されている民族は、アラン人を指すと考えられており、本書34節にも「アス人 Azzi」と称す

(95) Bretschneider 1888, I, p.285, n.676; Barthold 1968, p.179; Risch 1930, pp.147-148, n.5; Boyle 1958, I, p.87; Boyle 1964, p.184, n.69; Painter 1965, p.79, para.24, n.6; Pelliot 1973, p.40.

(96) Painter 1965, pp.102-104.

(97) Becquet & Hambis 1965, p.165, n.105. ハザール・ハーン国の宗教については、森安達也 1990, pp.164-169参照。

るアラン人 Alani」とあり、カルピニには「アラン人 Alani あるいはアス人 Assi」(VII章9節)と書かれている。かれらは10世紀にギリシア正教を受容した。<sup>(98)</sup>

25 ついでその時バティは、<sup>(a)</sup>くテルコメンの地方、<sup>(b)</sup>カンギト人の地方、そして大コマニア、さらには<sup>(c)</sup>ロシアも征服した。そしてロシアの首府であり、とりわけ大きく有名な都市キエフで、多数の住民を殺戮し、く何回も戦闘を行った末にそこを占領した。このことについては、それに向いた書き手が必要なので、今は述べずにおく。

◇カルピニV章27節

(a) テルコメン Tercomen 20節注(c)「テルケメン」の項を参照。

(b) カンギト人 Kangitae 20節注(e)「カンギト人」の項を参照。

(c) 「今は述べずにおく」 このロシア侵攻については、カルピニの方がかなり詳しい記述を残している。

26 くオコダイの子で、バティのいとこである現在のカンが、父の死を密かに知らされて戻るとき、帰途にあつてガザル人の地方、アラン人の地方、ついでTh'etの地方を占領した。最後にタルタル人の地方を。<sup>(a)</sup> . . . これらはキリスト教徒の地であるが、いろいろな言葉が話されており、海の近くで南方に位置している。こうしたのち、カンは自国へ戻った。

◇カルピニに対応箇所なし

(a) 「Th'etの地方を占領した。最後にタルタル人の地方を。 . . 」 この部分は、

---

(98) Minorsky 1970, pp.444-446; Melyukova 1990, pp.112-113; Jackson 1990, p.102, n.1-2. 1239年に始まるモンゴル軍によるカフカース地方のアラン人への攻撃については、Allsen 1987-91, pp.18-21に詳しい。

写本が傷んでいるため、正確には読めない、とくに、“Th’et” “Tartarorum<sup>(99)</sup> (タルタル人の)”の部分ははっきりしない。

27 ところで、くロシアにいたバティは、それからビレル人<sup>(a)</sup>つまり大ブルガリア、そしてモルドヴァン人<sup>(b)</sup>の方へ向かい、くそれらの人々を捕らえて自分の軍隊に隷属させた。そのあと、ポーランドとハンガリーに向かって進み、くその地方<sup>(c)</sup>の境界で軍隊を分割し1万の兵士を自分の兄オルドゥに委ねてポーランドへ派遣した。その地方では最初、多数の兵士が、クラカウとサンドミールのポーランド人指揮官<sup>(d)</sup>により混乱させられ、戦闘で殺された。しかし、嫉妬というものは非常に多くの悪徳を助長するもので、ポーランド人は、手に入れた幸運を、互いに連帯して守ろうとせず、思い上がった傲慢さのために互いに妬み合い、惨めにもタルタル人により殺害されたのである。

◇カルピニV章28・29節

(a) ビレル人 Bileri カルピニには、Byleri とあり (V章29節, VII章9節, IX章20節), ペネディクトゥスの *Relatio Fr. Benedicti Poloni* にも Byleri (7節) とある。これは、ヴォルガ河中流域に居住するブルガル族 Bulghar のこと。ブルガリア人の原住地と考えられていたため、「大ブルガリア Magna Bulgaria」と呼ばれていた。

(b) モルドヴァン人 Morduani フィン系の民族モルドヴァ人のこと。現在のゴリキー市の南方のオカ河、モクシャ河の辺りに居住していたといわれる。本書34節には Mordvi とあり、カルピニでは、Morduani (V章29節), Mordui (VII章9節), Morduini (IX章20節) とある。なお、かれらは、『集史』などのイスラム史料には、Burtās<sup>(100)</sup> と記されている。

---

(99) Painter 1965, p.81, Önnersfors 1957, p.19.

(100) Jackson 1990, pp.279–280.



- (c)「1万の兵士を自分の兄オルドゥに委ねて」 オルドゥとは、バトゥの兄オルダ Orda のこと。バトゥはハンガリーへ進軍し、オルダはチャガダイの息子バイダルとともに、1240年にポーランドへ侵入した。この節は、1万の兵をポーランド攻めに割いたと具体的な数字を挙げている点が興味深い。
- (d) ポーランド人指揮官 ドーソン氏によれば、クラカウ州知事のウラディミールが、サンドミールとクラカウの間のボラニーツ付近で、モンゴル軍の陣営を襲い、多数の敵兵を殺したという。<sup>(101)</sup>

## 文献目録

### A 史料

Becquet, D.J. & Hambis, L.

1965 *Histoire des Mongols*. Paris: Adrien-Maisonneuve.

Boyle, J.A.

1958 *'Ata-Malik Juvaini, The History of the World-Conqueror*. 2 vols, Manchester: Manchester University Press.

1964 The Journey of Het'um I, King of Little Armenia, to the Court of the Great Khan Möngke. *Central Asiatic Journal* 9, pp.175-189.

Bretschneider, E.

1888 *Mediaeval Researches*. 2vols, London. (Repr., London: Routledge and Kegan Paul 1967)

Cleaves, F.W.

1959 An Early Mongolian Version of the Alexander Romance. *Harvard Journal of Asian Studies* 22, pp.1-99.

Giles, J.A.

1852 *Matthew Paris's English History*. 3 vols, London. (Repr., New York: AMS Press 1968).

Jackson, P.

1990 *The Mission of Friar William of Rubruck*. (Second Series 173), London: Hakluyt Society.

Jahn, K.

1969 *Die Geschichte der Oğuzen des Rašid ad-Dīn*, Wien: Hermann Böhlau Nachf.

---

(101) ドーソン 1968, p.163.

- Lupprian, Karl-Ernst  
 1981 *Die Beziehungen der Päpste zu islamischen und mongolischen Herrschern im 13. Jahrhundert anhand ihres Briefwechsels*. Città del Vaticano: Biblioteca Apostolica Vaticana.
- Menestò, E. & C. Leonardi & M.C. Lungarotti & L. Petech  
 1989 *Giovanni di Pian di Carpine: Storia dei Mongoli*. Spoleto: Centro italiano de studi sull'alto medioevo.
- Minorsky, V.  
 1970 *Hudūd al-‘Ālam: The Regions of the World*. (Gibb Memorial Series, New Series 11), London: Luzac & Company, Ltd.
- Önnerfors, Alf  
 1967 *Hystoria Tartarorum, C. de Bridia Monachi*. (Keine Texte für Vorlesungen und Übungen 186), Berlin: Verlag Walter de Gruyter & Co.
- Painter, George D. & R.A. Skelton & E.Thomas Marston  
 1965 *The Vinland Map and the Tartar Relation*. New Haven & London: Yale University Press.
- Poppe, Nikolaus  
 1957 Eine mongolische Fassung der Alexandersage. *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, 107, pp.105–129.
- Rashid/TS 1518  
 Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-Tavārikh*. MSS. Topkapı Sarayı Müzesi, Kütüphanesi, Revān köşkü 1518.
- Rashid/Saltykov 2458  
 Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-Tavārikh*. MSS. Saltykov Shedrin, 2458.
- Risch, Friderich  
 1930 *Johann de Plano Carpini: Geschichte der Mongolen und Reisebericht 1245–1247*. Leipzig: Verlag von Eduard Pfeiffer.
- Rockhill, William W.  
 1900 *The Journey of William of Rubruck to the Eastern Parts of the World, 1253–55*. London. (Repr., Nendeln: Kraus Reprint Limited 1967).
- Ronchi, Cabriella  
 1982 *Marco Polo: Milione, Le Divisament dou Monde*. Milano: Arnoldo Mondadori Editore.
- Scala, Giuseppe  
 1966 *Salimbene de Adam: Cronica, Nuova edizione critica*. 2 vols, Bari: Gius Laterza & Figli.
- Wyngaert, Anatasius van den  
 1929 *Sinica Franciscana, I: Itinera et Relationes Fratrum Minorum saec. XIII et XIV*. Quaracchi & Firenze: Ad Claras Aquas.
- Yule, Henry  
 1926 *The Book of Ser Marco Polo, the Venetian concerning the Kingdoms and Marvels of the East*. 2vols, London. (Repr., New York: AMS Press 1986).

井筒 俊彦 (訳)

1958 「コーラン」中, 岩波文庫, 東京, 岩波書店.

王 國維

1940 「聖武親征録校注」『王国維遺書』第13冊, 北京, 商務印書館, (復刻: 上海, 上海古籍書店, 1983)

木崎 良平

1969 「原初年代記考 第三編索引その2」『鹿児島大学史学科報告』19, pp.51-79.

國本 哲男・山口 巖・中条 直樹 (編)

1987 『ロシア原初年代記』名古屋, 名古屋大学出版会.

護 雅夫 (訳注)

1965 『中央アジア・蒙古旅行記』東京, 桃源社(復刻: 東京, 光風社出版, 1989).

『元史』全15冊, 北京, 中華書局, 1976.

『三才圖會』王圻纂輯, 摺明万曆三十五年刊本影印, 全6冊, 台北, 成文出版社, 1970.

## B 参考文献

Allsen, Th.T.

1983 Prelude to the Western Campaigns: Mongol Military Operations in the Volga-Ural Region, 1217-1237. *Archivum Eurasiae Medii Aevi* 3, pp.5-24.

1987-91 Mongols and North Caucasia. *Archivum Eurasiae Medii Aevi* 7, pp.5-40.

Anderson, Andrew Runni

1932 *Alexander's Gate, Gog and Magog, and the Inclosed Nations*. Cambridge, Mass.: Medieval Academy of America.

Barthold, W. (Бартольд, B.B.)

1968 *Turkestan down to the Mongol Invasion*. 3rd ed., (*Gibb Memorial Series, New Series* 5), London: Luzac & Company, Ltd.

Boyle, J.A.

1968 Dynastic and Political History of the Īl-Khāns. In: J.A.Boyle (ed.), *The Saljuq and Mongol Periods. (The Cambridge History of Iran 5)*, Cambridge: Cambridge University Press, pp.303-421.

1974 The Alexander Legend in Central Asia. *Folklore*, 85, pp.217-228.

1976 Narayrgen or the People of the Sun. In: *Altaica Collecta, Berichte und Vorträge der XVII. Permanent International Altaistic Conference 3.-8. Juni 1974 in Bonn/Bad Honnef*, Wiesbaden: Otto Harrassowitz, pp.131-136.

1980 Alexander and the Mongols. *Central Asiatic Journal* 24, pp.18-35.

Clauson, G.

1972 *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*. Oxford: Oxford University Press.

Erdmann, Franz von

1862 *Temudschin der Unerschütterliche*. Leipzig.

Fennell, J.

1980 The Tartar Invasion of 1223. *Forschungen zur osteuropäischen Geschichte* 27, pp.18–31.

1983 *The Crisis of Medieval Russia 1200–1304*. London: Longman.

Golden, Peter B.

1992 *An Introduction to the History of the Turkic Peoples*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

Guzman, Gregory G.

1991 Reports of Mongol Cannibalism in the Thirteenth-Century Latin Sources: Oriental Fact or Western Fiction? In: Scott D. Westram (ed.), *Discovering New World: Essays on Medieval Exploration and Imagination*, New York & London: Garland Publishing, Inc., pp.31–68.

Kimble, George H.T.

1935 *Geography in the Middle Ages*. New York. (Repr., New York: Russell and Russell 1968).

Melyukova, A.I.

1990 The Scythians and Sarmatians. In: D.Sinor (ed.), *The Cambridge History of Early Inner Asia*, Cambridge: Cambridge University Press, pp.97–117.

Önnerfors, Alf

1966 Textkritische und sprachliche Bemerkungen zur “Hystoria Tartarorum” des C. de Bridia. *Mittellateinisches Jahrbuch* 3, pp.228–246.

Pelliot, P.

1920 A propos des Comans. *Journal asiatique* 11e série, 15, pp.125–185.

1923/24 Les Mongols et la Papauté. *Revue de l'Orient chrétien* 23, pp.3–30.

1950 *Notes sur l'histoire de la Horde d'Or*. Paris: Imprimerie Nationale.

1963 *Notes on Marco Polo*. II, Paris: Imprimerie Nationale.

1973 *Recherches sur les chrétiens d'Asie centrale et d'extrême-orient*. Paris: Imprimerie Nationale.

Phillips, J.R.S.

1988 *The Medieval Expansion of Europe*. Oxford & New York: Oxford University Press.

Pritsak, O.

1982 The Polovcians and Rus'. *Archivum Eurasiae Medii Aevi* 2, pp.321–380.

Poppe, N.

1967 On some Mongolian Words in the “Tartar Relation”. *Journal de la Société finno-ougrienne* 68, pp.1–14.

Richard, Jean

1967 R.A.Skelton, Thomas E.Marston et George D. Painter. The Vinland Map and the Tartar Relation, avec un avant-propos d'Alexander O.Vietor, *Bibliothèque de l'École des Chartes* CXXV, pp.242–244.

Sinor, Denis

1970 Mongol and Turkic Words in the Latin Versions of John of Plano Carpini's “Journey to

the Mongols”(1245-1247). In: L. Ligeti (ed.), *Mongolian Studies*, Budapest: Verlage B.R.Grüner, Amsterdam, pp.537-551.

Szczesniak, B.B.

1957 The Mission of Giovanni de Plano Carpini and Benedict the Pole of Vratislavia to Halicz. *Journal of Ecclesiastical History* 7, pp.12-20.

1966 Notes and Remarks on the Newly Discovered Tartar Relation and the Vinland Map. *Journal of the American Oriental Society* 86, pp.373-376.

Wright, John Kirtland

1925 *The Geographical Lore of the Time of the Crusades*. New York (Repr., New York: Dover Publications, Inc. 1965).

Zatko, J.J.

1959 The Union of Suzdal, 1222-1252. *Journal of Ecclesiastical History* 8, pp.33-52.

伊東 隆夫

1975 「インド=キリスト教史の序幕—聖トマス布教伝承をめぐって—」広島, 広島大学文学部東洋史研究室内, 伊東隆夫教授御退官謝恩事業会.

海老澤 哲雄

1993/94 「カルピニのモンゴル報告に関する覚書」「同(補遺)」「帝京史学」8, pp.1-32; 9, pp.51-69.

織田 武雄

1950 「中世の世界圖について」『史林』33-4, pp.1-25.

佐口 透

1972 「サリクーウィグル種族史考」『山本博士還暦記念東洋史論叢』東京, 山川出版社, pp.191-202.

志茂 碩敏

1980 「Il Khān 国成立後の「Adherbaijān 軍政府」起源の軍隊について」『アジア・アフリカ言語文化研究』19, pp.15-48. (『モンゴル帝国史研究序説』(東京, 東京大学出版会, 1995年), pp.97-112に「イル汗国成立後の「アゼルバイジャン鎮守府」起源の軍隊」として再録)

白鳥 庫吉

1970 『白鳥庫吉全集』4, 東京, 岩波書店.

ドーソン (C. d'Ohsson)

1968 『モンゴル帝国史』2, (東洋文庫 128) 佐口透 (訳注), 東京, 平凡社.

パムレーニ (E. Pamlényi) (編)

1980 『ハンガリー史』田代文雄・鹿島正裕 (訳), 東京, 恒文社.

延広 知児

1992 「モンゴルの第一次ロシア侵入(1223/4年)についての「ロシア年代記」所載記事集成 (I)」『立正西洋史』12, pp.16-30.

牧野 修二

1987 「チンギス汗の金国侵攻(その二)」『愛媛大学法文学部論集 文学科編』20, pp.1-22.

松田 孝一

1987 「河南淮北蒙古軍都万戸府考」『東洋学報』68・3・4, pp.37-65.

1992 「モンゴル帝国東部国境の探馬赤軍団」『内陸アジア史研究』7・8, pp.94-110.

森安 孝夫

1977 「チベット語史料中に現れる北方民族——DRU-GUとHOR——」『アジア・アフリカ言語文化研究』14, pp.1-48.

森安 達也

1990 「トルコ民族の発展：ウラルから東ヨーロッパへ」護雅夫，岡田英弘編『中央ユーラシアの世界』（民族の世界史 4）東京，山川出版社.